



275号
九州発

ジェンダー再考

「差別」と「情報」

労働におけるジェンダー考察

性の多様性

性の多様性をジェンダーの視点から考える

ジェンダーと慣習 I

女と財産

〈あこら〉との出会い三十年

新聞にジェンダーの視点を取り込む

追悼 広田寿子さん

広田 純 吉本洋子 横山雅子 高橋美保 ほか

辻元シヨックに想う

竹村泰子 中村道子

〈g・ll〉と沖縄の若者

大城宣武

沖縄市長選に立つ桑江テル子さん

『こどもの時間』をつくった 野中真理子さん

目次で振り返る『あこら』30年 II

船越 仲子

石原 豊子

河野 信子

加藤 祐子

福田 光子

森崎 民子

小島サカエ

室田 康子

あごら 275号 2002年4月〈九州発〉 ジェンダー再考

ジェンダー再考

「差別」と「情報」	船越仲子	1
労働におけるジェンダー考察 女性に進む「非正規雇用化」	石原豊子	2
性の多様性	河野信子	9
性の多様性をジェンダーの視点から考える	加藤祐子	10
ジェンダーと慣習Ⅰ	福田光子	15
女と財産 あごらで得たもの	森崎民子	28
〈あごら〉との出会い三十年 ジェンダーの視点に目を開かれて	小島サカエ	34
文献紹介 M・ペロー、河野信子ほか『歴史の中のジェンダー』/ 江原由美子ほか 『ジェンダーの社会学』/ 原ひろ子、大沢真理ほか編『ジェンダー』 ほか		39
新聞にジェンダーの視点を取り込む	室田康子	44
追悼 広田寿子さん 広田 純 吉本洋子 横山雅子 高橋美保 ほか		46
■意見・異見 辻元ショックを新しい力にしたい… 竹村泰子 中村道子		57
■沖縄から 〈9・11〉と沖縄の若者—アンケート結果から ……大城亘武		60
■試写室 映画『こどもの時間』野中真理子監督に聞く ……		66
■語りかけたいあなたへ 44 雪の音 ……大里知子		70
■TOPICS 桑江テル子さん、沖縄市長選に/子育て支援への改革を提言 ほか ……		72
■集会から 九州環境ボランティア会議/ ワークシェアリングと均等待遇 ほか ……		75
■from とうきょう 「戦災資料センター」オープン ……		78
■あごらめいと 沖縄市長選挙に立つ桑江テル子さん ……		81
■テレビから BSE拡大 — 知られざる真相 ……		82
■あごらのあごら 273号/274号/ チェチェン/ 新会員から ほか ……		84

「差別」と「情報」

船越 仲子

私はここ数年、自治体で人権・同和問題を担当していた。

同和問題は、日本固有の人権問題であり、一九六九年以降、同和对策審議会答申や地域改善対策特別措置法などに基づく同和对策事業が行われてきたが、国の特別対策事業は二〇〇二年三月、法の失効により終了し、一般対策に移行、見直し、廃止される。これまで特別対策事業により、国は一般対策より高い補助率で補助し、市町村が同和对策事業を実施し、これによって住環境面が改善された。しかし、部落差別で市民が最も気にする課題は、結婚問題であり、結婚差別解消は残された最も大きな課題と言われている。

人権の視点で様々な問題をまとめ、人権尊重意識を高めるための具体的な行動目標を定めた「人権教育のための国連十年（一九九五年～二〇〇四年）」を受け、「人権教育のための国連十年国内行動計画」（一九九六年十二月）がつけられた。そして、都道府県市町村へと広がりを見せている。また、「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」が（二〇〇〇年十二月）公布施行され、あらゆる人権の問題を中心にした、まちづくりが進められようとしている。

しかし、同和問題に示されるように、差別解消は遅々として進まない。その根源の一つに「情報」がある。いわれなき差別情報によって偏見が生まれる。偏見は固定観念に変わる。そこから差別の行動が始まる。この図式は、あらゆる差別の根っ子でつながっており、もとよりジェンダーとも深くかわる。〈あこら〉が、女性差別をはじめとするあらゆる差別撤廃のために、「情報」を活動の主体としてきたことは、その意味で意義深い。

〈あこら九州〉では、その一翼として、この一、二年、「ジェンダー」という言葉で括られてきた「情報」を再考してきた。また第一歩だが、その一端をご紹介します。

労働におけるジェンダー考察

——女性に進む「非正規雇用化」

石原 豊子

「野村證券訴訟」は勝訴したが

野村證券の女性社員十三人が会社に対して賃金昇格差別の是正と差額賃金などの支払いを求めた「野村證券男女賃金・昇格差別事件」裁判において、東京地方裁判所（山口幸雄裁判長）は、二〇〇二年二月二〇日、「一九九九年の改正男女雇用機会均等法施行後も違法な男女差別を維持した」として慰謝料及び弁護士費用（計約五六〇〇万円）の支払いを命じたことは、新聞、テレビ、『あごら』等でこ存じと思う。

男女差別の隠れ蓑になっているコース別処遇を、均等法改正後に限定されているとはいえず、違法と認めた判決は画期的で、私自身、会社勤めの一人として、この点は原告とともに大いに喜びたい。

原告側は判決が均等法以後に限った点などを不服とし、また野村證券も判決を不服として、すでに控訴していて、上級審で争われることになる。さらに前進した判決を勝ち取るように今後も注目していきたい。しかし最近の雇用状況は、さらにその先を行く大変な状態になってきている。

増えつづける「有期契約労働者」

「女性比が少なく男性中心の職場であり『男性の仕事、女性の仕事』といった性別役割分担意識が強く、女性が活躍できる職場風土になっていない状況である」(厚生労働省雇用均等・児童家庭編『働く女性の実情』二〇〇〇年版)と指摘されている建設業、いわゆるゼネコンに働いて二十七年になるが、ご多分に漏れずリストラが二回にわたって行われ、まだあるといううわさもある。女性事務職の正規社員がやめた後の補充は、すべて派遣社員でなされているが、それまでの従業員と業務内容はまったく同じである。もちろん男性社員も大幅に減ったので正規社員だけでは工事現場管理も大変になり、工事現場によつては有期契約労働で施工図を書く人も導入されている。その人は、よその建設会社をリストラされた人という。その現場が完成すれば期間満了に伴う契約関係の終了となる。有期契約労働は働く期間が定められた雇用形態である。

総務省の「労働力調査」によると、一年以内の有期契約の雇用者は、一九九五年で一〇・四%、二〇〇〇年で一二・五%と、二・一%も増加した。

厚生労働省が一九九九年に行なった「有期契約労働者に関する調査」によると、企業がパートを有期で雇用する理由のトップが「人件費の節約」(六七・六%)、二位は「仕事の繁暇への対応」(四

一・一％)だったそうである(複数回答)。働く側の多様なニーズにこたえるためというよりは、有期契約労働の採用はむしろ企業にとつてのうまみがあることが伺える。

進む女性労働者の非正規化

また表1のように、一九九一(平成三)年に比べ、二〇〇〇(平成十二)年では、男女とも正規の減少、つまり非正規の増加が見られるが、女性労働者における正規の割合はマイナス九・二ポイントと大きく低下しており、男性がマイナス三・二ポイントに対してその差が大きいことがわかる。

さらに、有期契約労働の一つ、パート労働に関して言えば、一九九九年の女性一般労働者(パートタイム労働者を除く)の平均所定内給与額二二七、五〇〇円に対し、パートタイム労働者の平均時給は八八七円であり、週四〇時間、四・五週として計算すると一五九、六六〇円となる。これだけでは単純に比較できないものの、その格差の大きさは際立っている。「かつてパートは補助的な仕事に従事していた。だが今のパートは正規社員の代替要員となっている。正規社員並みの重責を担うパートも出てきているのに、賃金格差は相変わらず大きく、むしろ拡大傾向にある」(厚生労働省・雇用均等・児童家庭局長 岩田喜美枝さん談)。

表2でもわかるように、パートタイマーの多くが女性である。パートタイマーと言われながら、実際にはフルタイムで働く人は多いのである(「擬似パート」)。「女性のワーキングライフを考えるパート研究会」(酒井和子代表)が一九九九年に実施した調査によると、パートタイマーを中心とする民間企業で働く女性の非正規社員のうち、週三〇〜三九・九時間働く人が全体の四三・二％を占

表1 正規雇用者比率の変化

	1991年	1993年	1997年	2000年
女性雇用者	62.8%	61.5%	58.2%	53.6%
男性雇用者	91.50%	90.60%	89.50%	88.30%

資料出所:総務省統計局「労働力調査 特別調査」から

表2 雇用形態別割合

1999年	役員を除く 雇用者	正規の職員・ 従業員	パート	アルバイト	委嘱・その他
男	100	88.9	1.5	5.6	4
女	100	54.8	32.2	8.8	4.3

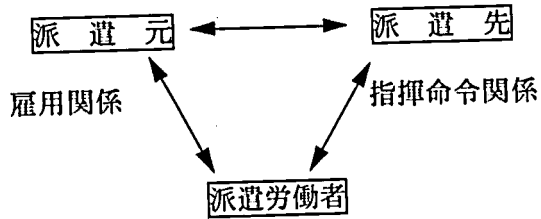
資料出所:総務省統計局「労働力調査 特別調査」から

「派遣労働者」も問題

め、同二〇〇二・九時間の三四・三%を上回った。四〇時間を越える人も、九・五%もいた(日経新聞二〇〇一年十月二日より)。パート労働は家計の足しといった状況ではなく、特にリストラが進む不安定な雇用状況下では家計の中心的な役割をも担っているのである。正規社員の中で男は総合職、女は一般職ということで差別して女の労働を安く買ってきた企業だが、パートという名をかぶればさらに安く買えるのである。

同様なことは派遣労働者にも言える。一九八五年、「男女雇用機会均等法」ができた同じ年に「労働者派遣法」ができた(一九八六年公布)。そもそも、労働関係の基本は、使用者と労働者の二者の関係であつたはずが、派遣元(雇用契約をしている)、派遣先(実際に勤務している会社)、派遣労働者の「三角関係」になる。労働者は派遣先とは雇用関係がなく、派遣先の指揮命令を受けて、労働に従事させられる。私もメンバーの

[労働者派遣契約]



一員である、福岡の働く女性のグループ（変えよう均等法 in 福岡（現ワーキング・ウィメンズ・ヴォイス）は、一九九六年に多様な雇用形態で働く女性たちに対し面接調査を行なっている。そのなかで当時、女性のニーズに合った働き方と喧伝されていた派遣労働の女性たちは、「仕事内容は正社員とまったく同じなのに待遇はまったく違う」「交通費や出張手が出ない」「健康保険に入れてくれと要求したがだめだった」「仕事の継続の保証がない」「派遣社員は道具」として非人間的に働かされた」「派遣登録は三十五歳まで。三十五歳を過ぎると派遣先から求められなくなる」と不安や不満を述べている。

派遣は専門職で高給というイメージが作り出されていたが、実際には年収一〇〇〜二〇〇万円の人もおり、派遣だけでは収入が少なく自活できないからと、週末や夜、飲食店などのバイトをしている人もいた。

ジェンダーで抑え込まれる女の賃金

「女性は結婚するまでの短期労働者だから補助的仕事に。だから給料は安く」とされてきたが、結婚退職差別に対する裁判闘争などを経て、女性も継続して働くようになってきた。その後、均等法が登場すると、女性は一般職、男性は総合職、と自動的に振り分けられ、「一般職は補助的労働だから給料は安く」と、野村證券裁判や住友裁判に見られるように、採用区分の違いで差別している。

さらには一歩進めて一般職の女性正社員の採用を抑えて、派遣やパートを積極的に導入して人件費を安くあげようとしている。

家庭で家事、育児などのケア役割を女性に無償で担わせ、さらに介護職のように仕事を社会化しても、女性には低賃金しか払われない。会社においても一般職という名のもとに、男は外回りの営業、女はそれを補助する事務というように、やはりケア役割を担わされ押し込められている。パートは家計の足しだからと、低賃金である。企業は「ジェンダーという、社会的に作られた性差」に基づき、女性であるという区別を差別に利用して、本人の意思や能力に関係なく、女性の労働力を安く買い叩いているといえよう。

労働者は工場の部品か

今まで家庭のみならず、職場においても発揮された性別役割分業に基づく女性に対する差別待遇によって、企業側は「うまみ」を得てきた。今度は、雇用形態の区分ということで、それを全面的に男性も含めた全労働者に押し進めようとしているのではないだろうか。

一九九五年、日経連は「新時代の『日本的経営』——挑戦すべき方向とその具体策」で、労働者を①長期蓄積能力活用型（従来の長期的かつ継続的雇用）②高度専門能力活用型（専門的熟練、能力によって限定雇用）③雇用柔軟型（企業の求めるさまざまな職務に対して雇用者の側も自由に選ぶ）に分けることを提唱している。早い話②と③は流動的、不安定雇用で、特に③は女性が大半を占めるパート労働者や派遣労働者を念頭に置いている。

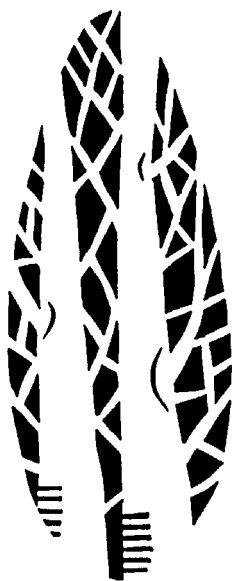
一九九九年の「新派遣法」といわれる派遣法の大改正では、従来限定されていた派遣の職種を原則、自由化した。政府の規制改革会議の委員である八代尚宏上智大学教授は、「派遣がこれからの基本になる。正社員にいつまでもこだわるべきではない」と発言している。

ごく一握りの幹部正社員と、一方では有期雇用の契約社員、派遣社員、パート労働者などの不安定雇用者とに分けられ、いま派遣労働者が抱えている不安や不満が、全労働者共通のものになる日も遠くないのである。

企業が雇用者が必要なときだけ雇えるようにした方が雇用が増えるというのが推進派の言い分だが、雇用がどれぐらい増えるかは実証されているわけではない。確実なのは正規雇用がますます抑制され、不安定雇用が増大するということである。私たち労働者はトヨタの工場の部品よろしく、必要なときに必要なだけ働く存在になるのである。

そんな不安定な状況で、家庭を作り子どもを産み育てていくことができるだろうか。誰が将来、税金を払い、年金を払い、社会を支えていくというのか。

どこに政治があるのだろうか。



性の多様性

はじめに

河野 信子

福田光子さんと私は、一九九二年末から一九九八年にかけて、『女と男の時空』（藤原書店・本編全六巻・別巻年表）を編集した。この期間、編者たちも執筆者たちも、女と男の境界にはばやけた領域があることを、ジェンダーとしては、認識していた。しかし、セックスとしてのグレイゾーンについては、両性具有者（生命体として）たちの存在をぼんやり意識していただけであった。ところが、発行後の一九九九年、片山こずえ氏の「月は満ちたか……」（池田祥子編『「生理」性差を考える』所収・ログス社）に行き会ったとき、セックスにもまた、グレイゾーンがあることを思い知らされた。

片山こずえ氏は、自己の無月経についての省察を書いている。これを読めば、その時まで人の性は女と男に明確に二分されていると、信じ込んできた愚かさと思い至るのである。「女性性」を誇示し強調することは、加害の鞭を振りまわすことに加担することである。

「月は満ちたか……」によると、小中学にかけて教師が女生徒だけを教室に集めて「生理が始まった人は手をあげて」と聞く。片山氏は、中学生の終わりになっても手をあげられない。そこで「世の中にこんな無神経な質問があるだろうかと思った。夜中に目が覚め、密かな悩みを抱えたまま朝まで眠れない日が続いた……」と言及されている。

教師に悪意はなかったであろう。「性教育」の手がかりにしようとしたただだったかもわからない。しかし、ばやけた境界について凝視を欠けば（悪をなす）。これはその事例である。

人の第23染色体（性染色体）は力オスである。XXならば女、XYならば男である。しかし、XO・XXX・XYY・XXXなどといったように多様性をはらんでいる。

この多様性について一九六〇年頃から研究論文が発表されはじめた。さしあたって、私は、この力オスが非線型決定論を導くことによって、差別に加担することには、抵抗しつづけたいと願っている。そのためには、自然科学系の加藤祐子さんの省察力と言及に頼るしかない。

性の多様性をジェンダーの視点から考える

加藤 祐子

〈あこら九州〉の河野信子さんらの問題提起を受けて、若干の、生物学的観点から性の多様性を考

えてみることにした。

ヒトの性別は女と男の二つの性だけであると長いこと考えられてきたし、またそれが当然のこととして社会環境のなかで受け入れられてきた。

生物学的には、性の決定は次のようにして起こる。DNAの中に存在する性染色体は二三対(四六本)あり、そのうち二二対は常染色体であり、残りの一対が性染色体である。性原細胞は減数分裂して受精の前に卵子はX染色体を一つ、精子はXかYのどちらか一つをもつ二種類となり、XかYのどちらが卵子と受精するかで性別が決まる。遺伝学的にみると、女性性(XX)の性染色体を持ち、男性性(XY)染色体を持つとされている。もつと正確にいうと、XXの染色体構成を持つ場合、性表現型は女性となり、XY染色体構成を持つと性表現型は男性となる。

ここで、性の決定がどのような染色体で決まていくのか、ということを考えてとき、「男性だけがもつY染色体の中にはわずか二六個の遺伝子しか存在しない」、という驚くべき発見が、英国の雑誌『Nature』(二〇〇一年二月十五日号)に報告されていた。ということは、男性と女性の違いは、わずか二六個の遺伝子によるだけの違いということになるのか。

さらにもう一つ見すごせないことがある、それは性の決定が一体どの時期に決まていくのかというと、受精後七週目頃までは、性的両能期といって男女どちらの性にも分化できる。この時期までにY染色体にあるSRY遺伝子という男性化を促す遺伝子が発現しなければ、ヒトはみな女性になると考えられる(文献1)。

一九四九年、染色体構成はXXとXYだけではないことが発見された。二つの難病であるターナー症候群とクラインフェルター症候群が、性染色体構成の異常が原因であることから判った(文献

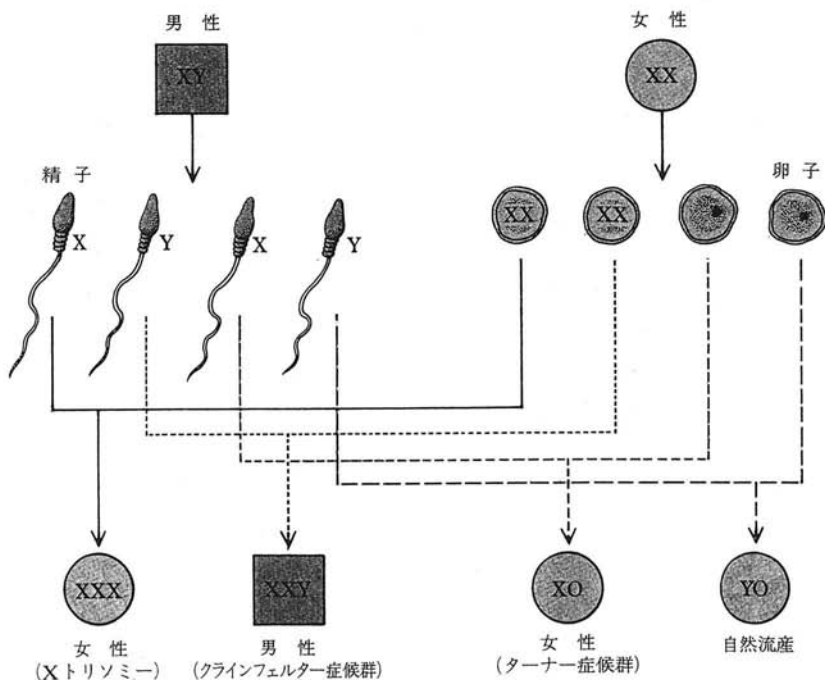


図1 不分離の結果、性染色体数の異常が起こる

2。ターナー症候群（註1）のヒトの染色体構成はXOで、表現型は女性であり生殖器も女性であるが、子宮や卵巣組織が未発達のために、女性ホルモンが少なく不妊のことが多いとされている。また、クラインフェルター症候群のヒトの染色体構成はXXYで、表現型は男性であるが、精子が小さくて男性ホルモンや精子数が少ないため不妊となることが多い。

これらXOやXXYの性染色体を持つことは、決して稀なことではない。ターナー症候群（XOの染色体）の人は三五〇〇人の女子の出生に一人の割合で出生し、クライン

フェルター症候群（XXY染色体）の人は四〇〇〜六〇〇人の男子に一人出生する（文献²）。YOは致死となる。

XOやXXYの染色体がどうしてもできるかというと、性染色体の不分離から起こる。つまり、減数分裂から性細胞が生じるときに性染色体が適切に分配されないか、受精卵の細胞分裂において適切に分配されなかったことが原因となる（図¹）。XX性染色体をもつが、体つきは男性になる場合、X染色体上にSR Y遺伝子が発見され、XY性染色体であるが体つきは女性になる場合、Y染色体上にSR Y遺伝子がなかったという報告がある（文献¹）。

さらに、性染色体の遺伝モザイクという現象も起こり、この場合XO/XX、XX/XXX、XX/XXXX、XX/XXXXXなどの性染色体構成では表現型は女性であり、XY/XXY、XY/XXXXY、XXY/XXXXY性染色体構成では表現型は男性であることが多い。性染色体の遺伝モザイクを持つとき、卵巣組織と精巣組織の両方をあわせ持つ「両性具有」となる。

自然の摂理のなかで、偶然に起こった性染色体の組み合わせや分配は、自然淘汰（自然流産）されることもあるが、生を受けて出生される場合もある。しかし社会では男性か女性の二つの性別が当然のこととして受け入れられてきたため、第三の性あるいは、sexual minorityとも言える人たちの市民権は、ほとんど顧みられることがなかった。

このことは、女性解放運動のなかでも同じ状況で、男と女の慣習的な性差別や差別社会、労働における不当賃金などの問題提起や運動がなされてきたが、中間の性の人びとの人権についてはほとんど問題提起もされなかった。知らないこと、つまり無知であるために、例えば「おとおんな」あるいは「おんなおとこ」と呼び、人が人を差別してきたことを深く反省しなければならない。

しかし、最近のテレビ放映のなかで、乙女派や sexual minority という呼び名で子どもたちの見る番組にも登場してきた事実も見逃せない。

ジェンダーの視点から社会的な性差をとらえかえすとき、決して無視しては通れない問題と考える。彼らの市民権や、社会的偏見や差別に関わる問題として、性の多様性を自然なことだと、ふううに受け入れられる状況をこれから考えていきたい。

註1…ターナー女性の会では、「ターナー症候群」を「ターナー女性」と呼ぶように提案している。

文献1 『Newton』別冊・二〇〇一年十月十日号

文献2 サム・シンガー『人間の遺伝学』（東京化学同人、一九九五年）



● II 前「近代」に遡って

ジェンダーと慣習 I

福田 光子

生物学上の性差と区別して、文化的・社会的性差と定義したジェンダーの視点で歴史を考える傾向が盛んになりつつある。

これまで歴史といえは事件中心の政治史や物の生産、流通などを中心とした経済史の研究を主流と考えがちで、登場する歴史の主体が男性中心であることは、さほど不思議でもなかった。しかし有史以来、今日まで男だけ、あるいは女だけで生きてきた歴史はありえない。女と男が、ある関係性の中に生きてきた事実を追及しようとするれば、当然社会史が光を浴びてくる。同時に生活様式だけでなく思考様式や物の見方など文献史料の中で探ろうとしても限界のある、いま一つの領域が浮かび上がってくる。それは記録されたもの以外に口頭による伝承や慣習のように、あるいは図像のような非記録的な世界にまで目を注いで、一般の民衆に共通した心性を読み解く心性史のジャンルにまで関心を広げることによって、これまで見えにくかった世界が開けてくる。ここで取り上げる慣習も、その一つである。

(一) 慣習の及ぶ領域

いま、ジェンダーと慣習にこだわる理由は何だろう。結婚、離婚、子の出生、親きょうだいとかかわり、人の死や継承、死者との交信など家族を単位とした慣習から、さらにそれを超えた地域社会に人が身を置く時、多少にかかわらず慣習から自由にはなれない。馴れ合って生きるか違和感を引きずって生きるか、もとより個人差はあるものの、慣習の見えない制約の中で人は生きなければならぬ。

ジェンダーと慣習にこだわる理由は、端的に言えば、女とか男とかの性別役割の意識と慣習は同じ根っこで結びついて、その制約が人の日常に与える影響が決して小さいものではないからである。

性別役割分担という行動パターンは、いつの頃から誰が決めたわけでもなく、法的な規制に依るものでない以上、それはとりもなおさず慣習そのものとも言える。つまり舞台の上の小道具・大道具が慣習ではなく、舞台装置そのものが慣習なのである。

個人的な日常の行為の繰り返しの中に見られる習慣と異なり、慣習は歴史的に作り上げられた社会的営為の色合いを帯びて一定の範囲の社会全体にそのかかわりを持続する。つまり、そこに生きる人びとの間で社会生活上、多少にかかわらず共通して反復が行なわれ、それ故に人びとの間で拘束力を感じられるようになる定型的な行動パターンであり、一種の社会規範となつて定着していくもののである。

慣習は、いつどのように発生するものだろうか。雨が降ったり霧が立つ自然現象とは違って、あくまで人為的なものであり、それは多くの場合、共同体や集団の合意が含まれるがゆえに、時に抜

き強く強い集団の意志として働く。ある時にはまた、その共同体内部の秩序の維持の為に作用し、さらに戦略に化けることも起こりうる。自分だけが、その外に外れることがなければ、共同体の意志から自由にはなれない難しさを抱え込むことになってしまふのだ。

さて、「男女共同参画社会基本法」という新しい法律も、この慣習・慣行を避けては通れない。法の理念をうたう第四条に「社会における制度又は慣行についての配慮」とある。この法律が指す慣行とは何を意味するのだろうか。小道具・大道具だけなのか、舞台装置までも含むのか。配慮という表現は些か遠慮がちであつて、本気で舞台装置までひっくり返すつもりはないように思われる。ジェンダーにかかわる慣習に対して強い否定の気迫は感じられない。共同参画以前に対等ありき。女と男が対等な立場で参画することを目指すためには、性別役割分担とその意識の見直しに關する限り、まさに「聖域なき改革」が必要であり、慣行への配慮でお茶を濁すわけにはいかない。

超氷河期と言われる就職難の時代、女性の短期雇用化が目まぐるしく進んでいる中に、女子短大生の雇用も呑み込まれていく。中には流れに身を任せて不本意な職場に^{はま}るよりは時を待つ、開き直り組もいる。待つ間をどうするのか。アルバイトやフリーターでつないで幾つもの仕事を渡り歩いている間に仕事の実質中身を探り、自分の適性を見究め、社会と自分との関係性を考えるという。卒業しても、すんなりとはゆかぬ学生の選択の行方は甚だしく不透明だが、それは不況のせいだけではないことを彼女たちはどうに気づいている。黙って高い月謝を払った母親たちの中で、少しでも物の解っている母親なら、「男女共同参画の時代」とテレビでも新聞でも活字は踊っているのに、何も世の中は変わっていない、やっぱり女性はずかばかしい、と考えている。労働基準法も、均等法も、今度の基本法も特効薬にはならない。

(二) 風習と慣習

長い間続いてきたしきたりの中で、風習と言われているものと慣習は、いささか違いがあるように思われる。

数年前のことであつた。近しい身内の者の葬送の際、いよいよ説経が終わり、死者の遺体を棺に納め茶毘^{だひ}に付するに先立つて、死者の縁につながる男性たちが立ち上がって傍らに用意された浴衣を裏返しに着て、あらかじめ切り揃えて置かれた荒縄を腰に締めて全員で遺体を棺に納める情景に直面した。

なぜ男たちなのか。裏返しの浴衣と荒縄は何を意味しているのか。そのわけを問うこともなく、おそらく古老の仕切りのままに従つてきたまでのことであらう。

これまで長く引き継がれてきたしきたりを自分の代で廃めてしまふなんて滅相もない、と何かの祟りを恐れる気持ちもどこかで揺れる。私の自己流の解釈だが、死は晴天の霹靂であり、この不幸は日常あつてはならないこととして、着物を裏返しに着るなど、もつてのほかの非日常を演出することで災禍を免れようとするしきたりであらうか。因みに荒縄は罪人が裁きの場に引き出される時の腰縄を連想させる辛い場面を思い浮かべる。これもあつてはならぬ非日常の演出であらう。

この光景に、都会からこの家に入家した次男の妻は、すべての葬送の行事が終わつた食事の席で「こんな野蛮な風習をこれからもずっと続けなきゃならないと知っていたら、結婚してこの家の嫁にはならなかったのに」と本音で違和感を口にしたものだ。

茶毘に付された後、遺骨は遺族の腕に抱かれて故人として再び家に帰つてきた。火葬に立ち会つ

た親族たちは、家の角に置かれた白と杵の前に立つ。水一滴も入っていない乾いた空白に杵で軽くコツンと掲ぐ真似事をしてから順番に家に入るのである。「空白を掲ぐ」なんて縁起でもない、と日常忌嫌う行為によつて、非日常を演出したものであらう。

世代間の意識の差も激しく、後継者も郷里にとどまらない昨今、この種の風習は、やがて消滅していくだらう。

(三) 慣習のエネルギー

消滅していく風習と、抜き難く強固に持続していく慣習とが本質的に違ふとすれば、その違いは何か。

消滅して構わないことと、いわば戦略として持続を必要とすることとの相違が見えて来る。

女と男が性別によつて別々の役割を担うことは、いつ誰が決めたというわけではなく、性が決める手となる生活行動や生産行動を繰り返す中で、その折々の合意の結果として役割を決めて来たものである。前近代には、民衆の生活の規範となる法律はなく、すべて慣習に依るしかなかった。

しかし、互いの役割を頑なに固執するほどのものではなく、互いに融通と越境を繰り返しながらトータルな人間の営みを持続して生きてきた。それが言わば、自然に寄り添う生きようであつたとも言える。種蒔きから収穫まで、同じ畑で女も男も共同で働く姿が当たり前であつた。商家でも表向きはどうであれ、旦那と内儀は帳面付けも商品の管理も客の応対も共同で役割をこなして当たり前だつた。

個人レベルでの融通無碍な役割行動が許されていた時代から、明治以降、いわゆる近代の性別役割分担は段階的にはあるが固定化の方向へと急速に進んだ。そこには、慣習によつて集団や社会に一定の秩序を保っていた時代から、支配層による、より戦略的な秩序の「安定」化が始まったことを意味する。

「近代化とは何か」が問われて久しいが、それは「前近代の検証」と機を一にするものであろう。「性別役割分業の固定化」が、キーワードのひとつとして一九七〇年代からクロースアップされてきたことも、「近代化」への疑問に迫るジェンダーの視点なのである。

(四)前近代の慣習

仕事がら本の目録に目を通すことが多いのだが、ある時古い図書館の目録をみて驚いたのは、戦前の旧植民地の旧慣調査の夥しい数であった。例えば、台湾総督府が十一年間をかけて行なつた漢民族及び原住民の慣習・慣例の調査など、おそらく統治の上で異民族の民俗、信仰、慣習は必要不可欠の情報として細部にわたつて採集したものであろう。民俗も慣習も固有の文化である以上、異文化を理解せずして統治の論理は成り立たない。この調査の結果、同一民族間の争い事の場合、日本の民法に依らず慣習法に基づいて裁くべきことが具申され、明治政府は、その具申を採用している。

これは他のどの国も実施しなかったこととして、近年、国際学会でも高い評価を受けている。同様に、時代が大きく移り政権が代わる時、為政者は支配の要に、これまで、民衆が依拠して来た規範としての慣習を、これからの体制にどのように組み込むかを民心収攬しんしんらんの手がかりとすること

は、統治の成功を約束する手法と考えたに違いない。

「近代」、いわゆる明治になって国民国家としてスタートするにあたり、日本はどのような理念をもつて国家の方向付けを行なおうとしたか、『全国民事慣例類集』というきわめて興味深い資料が残されている。

明治政府は、司法省の手で民法制定の参考とするために、民間に長く存続してきた慣習を、全国まさに津々浦々の実態としてまとめあげた。これをまとめるにあたっては、全国から選ばれた故例諳熟とされる人びと六百余人によつて、それぞれ属する地方の慣習を陳述させたのである。

六百人が語る実に多様な慣習は、読むものを飽かせない。地方に住む訳知りの人物が語る民衆の生活文化や人情が、慣例・慣行という名で展開される。それは近世二百六十年の長い年月をかけて段階的に成熟した多様な慣習であり、民衆文化として極めて興味深い事例集である。

子の出生の事、婚姻の事、死亡の事、相続の事といった章だてを設けているが、本書の凡例が慣例類集編纂の主旨を語っている。

「凡ソ人民群居シテ始テ人権物権ノ争論生ス争論生シテ始テ判断スルノ議生ス其議皆町村庄屋名主等ノ私言ニシテ固ヨリ政府ノ公認スル法ニ非スト云ヘドモ人民相因襲シテ服従スル所ノ者之ヲ慣例ト云フ」とある。

「政府ノ公認スル法ニ非スト云ヘドモ人民相因襲シテ……」の文言に示されているとおり、人びとが古いしきたりに従つて服従してきたものには理があつたという箇所には妙に納得させられるのだが、この全国的で多様な慣例は、遂に民法の参考にされることはなかった。その経緯については明らかにされていない。

あえて、ジェンダーの視点で憶測をたくましくするならば、明治政府の戦略上に不都合があったからであろうか。

(五)「近代」の怪しさ

「明治は古き良き時代」と謳歌する男性の気持ちに共通している点の一つをあげるとしたら、女性の献身と服従の根拠となる法的整備に成功し、男尊女卑の觀念が普遍的価値觀となつたことがあげられるであろう。公娼制度と戸主の權利を、その象徴的事実とする説もある。愛し合っている男女に戸主の同意がなければ婚姻は許されなかつたし、相続権も戸主の認める男子に限る家督相続権を以て、女性は経済的に無權利の状態に置かれた。いわば、経済的無能力者の扱いであつた。

「近代」以前、女性は封建制の下で抑圧されていたとする説は、長く定説とされてきた。しかし必ずしもそれは正しくないことが次第に実証され、抑圧一辺倒の見方に修正を求める研究も多い。先にあげた『全国民事慣例類集』の陳述を仔細に読み解く限りでも、女性がただ抑圧され続けたとは考えにくい面もある。

例えば、長い間、女性は「三行半」による夫側からの一方的離縁を強いられて、泣く泣く別れなければならなかつたケースがすべてであるかのごとく考えられてきたが、実際には不埒な夫を見限つて妻側から申し出る離縁もあらわれ始めていた。

また、相続慣行も長子単独相続が困難な事情の中で女性相続も例外ではなく、長女が相続人となつて養子を迎える中継相続として「姉家督」といわれる慣行も、東北地方に特有の形態として法律

学者の研究対象となつたことも知られている。

一般的に「家」の意識が庶民の中にも芽生え、共同体からの離脱とともに、婚姻や離婚をめぐつて家と家との対立が見られる時代となつた。

明治以後を近代として近代を美化する近代主義は、時に、前近代の慣習を弊風陋習として顧みない荒っぽい歴史観によつて閉ざされていた目を少しずつ開いて、後ずさりして逆光で近代を後方から眺めることが必要であらう。

明治初期の民権運動家として知られる岸田俊子が『自由の燈』に寄稿した「同胞姉妹二告ぐ」の言説は、男尊女卑を戒める強い気迫に充ちている。婦人の能力、精神力は、決して男子に劣るものではなく、男女は同等であることを説き、これに異を唱える者に徹底的反論を以て応じている。この激しさは幕末明治の動乱の中で蓄えられたエネルギーの放散であつた。

俊子は江戸時代末期の文久年間に生まれ、明治の自由民権運動の昂揚期に政壇演説で男女同権を激しく訴えたことで知られるが、明治十六年、滋賀県の演説が不穏当と投獄もされている。運動家としての鋭い洞察は、女性の地位のその後の行方に対する警鐘とも窺える。

（六）雑誌メディアにあらわれる「良妻賢母思想」

明治初期の思潮を見るに、男性と女性の関係、その位置を巡つては、既に男女は同等であるのか同権であるのかについても論調に多少の違いが見受けられる。

当時の雑誌メディアとして多くの男女の読者を傘下に集めた『女学雑誌』に見る説も例外ではない。

文明開化の波に、男女同権が謳われる中で、主宰巖本善治は、『女学雑誌』の誌上に「男女同等論」を書いてゐる。

「当今、さしあたり女権拡張の途に存する必要の事柄を申さば、第一從來の悪習慣を破りて世人総に女子を同等の人類なりと認めしむること尤も必要と存じ候（略）成程公平明白に申せば、今日の婦人方は知恵も才力も悉く男子に劣ること勿論なりと雖ども凡そ一個の人間として天賦人權は知恵才覚権威勢力の属に一分にても増減あるべきものにあらず。今日實際男女の才智は何如ほどに相違すとも人としては之を同等に見なして敬愛自重するの念が男女の相方にこれなくてはならず。」この「男女同等論」はキリスト者としての巖本の信仰に基づく「神の前の全人類同等」の觀念のゆえに両者それぞれの職分があるとする男女異質論、職分類が成立する。

巖本善治の女子教育思想の根幹には、この男女同等論、男女異質論、職分論があり、さらに言えば、「女は常に保守にまさり男は進取に長ぜり、然れば物に感ずること、心を推し量ること思ひやりの事、愛慕のことなどは女の長ずる所にして」と女の特質を述べて、さらに懐胎分娩の一事は、その關係を生理上心理上の双方に及ぼし婦女子はこれが為に力弱く感情濃やかに愛念深くして女子は内を修むべきものなりと。」

いささか引用が長くなったが、ここから、巖本の「良妻賢母思想」が導かれる。この思想の著しい特色は、三論即ち男女同等論、男女異質論、職分論を切り離すことの出来ない一体の關係に組み立ててゐることで、その後の男性中心社会における良妻賢母主義とは一線を画するものであった。文明開化、民権自由の思潮を背景に華々しくスタートした『女学雑誌』のメインテーマの一つは、あくまで女学と女子教育思想にあった。主宰者の巖本善治はその代表格であつたが、さらに多くの

声を聞かなければならない。ただ、共通して汲み取れるのは、当時の世論は、欧米先進諸国の文明に遅れをとっている存在として自国を認識することに急であつた。それゆえにこれまでの伝統や慣習に新しい文明をどう連続せしめるかに思いをひそめるよりも、過去の遺産を旧弊陋習としてそれに代わる醇風美俗を採さねばならなかつた。

本稿の紙幅に限りがあるので、この辺の諸々の事情については、近代女性史関連の研究書に譲るとして、ジェンダーの視点からの結論を急がなければならない。

注目しなければならないのは、醇風美俗の象徴として謳われ始めたのは、独特の日本的「いえ」制度^(*)であり、その中に位置づけをもつ女性像の象徴としての「良妻賢母」であつた。これは明治二十年代、自由民権運動の退潮に代わつてナショナリズムの台頭に伴なう富国強兵論は言うまでもなく、日清戦争に始まる長い戦争の歴史を正当化する観念であつた。

明治二七、二八年、日清戦争開戦の直前に、『女学雑誌』は度重なる発行停止や休刊の後、約二十年の幕を閉じて廃刊となつている。

(*)「いえ」制度は、法制史上の学術用語

むすび

前近代、江戸時代末期には一般庶民も家意識を持つに至つた状況の中で、営々として農にいそしみ、商いを営む人びとが、経済力を高め商品流通を盛んにする営為から、家業、家産、家名に関心を抱くに至つたのは理の当然であつた。そのことは個々の家が従来型の共同体からの飛翔を意味するものでもあつた。

多様な慣習を成熟させながら発展を望む前近代のエネルギーと、明治以後の国民国家が作り出した「天皇制下の家族国家」との間に、連続性はないことへの説明は難しい。

併し発展可能態としての民衆のエネルギーは、天皇制下の家族国家に呑み込まれてしまった事実
は否定できない。

家族も慣習も、もちろん性別役割分業も、「日本の特異な近代化」を彩る富国強兵政策の猛々しい嵐に収斂され、良妻賢母主義イデオロギーを醇風美俗の象徴として性別役割分業を戦略化したことは、まさに歴史の皮肉としか言いようがない。

良妻賢母主義イデオロギーは、戦後の「いえ」制度の崩壊とともに呪力を失った。もちろん、醇風美俗としてのそれも威力を失った。しかし性別役割分業は、新憲法、民法制定後も、また高度経済成長の時代にも、なお依然として持続している。日本の特殊な情況はそれとして、国際的にも普遍的な課題として性別役割分業の見直しが女性問題の要として、「国際婦人年」以来、国連規模でもとりあげられてきたことは周知のことである。この根強い持続の理由は何だろう。

産業社会と企業論としての能率優先の条件に、男は仕事、女は家事育児の性別分業がマッチした結果として体制の戦略が成功したことがあげられよう。それは近代を美化する目くらましによって実態を隠蔽してしまったことを見逃すわけにはいかない。さらに言えば、生活者としての女性の存在証明として「主婦」という名の居場所を女の自立と引き換えに獲得することで役割分業が固定化された等があげられよう。

いま、それらが実態としては漸く崩れつつあるが、意識の面では慣習としての性別役割意識の制約から離陸しえない。

「男女共同参画社会基本法」の前提は、ジェンダーイクオリティ (Gender Equality) にあることを、女の側の戦略として真剣に考えたい。その意味では多くの女性たちが提唱しているように、「男女共同参画社会基本法」は、「男女平等基本法」に変えなければならぬまい。

(本稿は、紙幅の関係で、後半の一部を割愛しました。筆者による『女学雑誌』に見る慣習』は、追って『あいら』誌上に連載する予定です。)

〈あいら〉三十周年記念エッセー募集

■テーマ (1) 私にとってのジェンダー

(2) 私と〈あいら〉

■字数 一、二〇〇字以内

■締め切り 二〇〇二年六月三〇日

※作品は、未発表のものに限ります。

※(1)(2)とも、最優秀作には賞金三万円。入選作は一万円の、些少ながら賞金が出ます。

※入選作は十月発行号に掲載の予定です。ペンネームでも可。

ご応募お待ちしております。

「作品送付先」 あいら事務局 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

TEL 03(3354)3391 FAX 03(3354)6014 E-MAIL XLV05467@nifty.com

女と財産

——あごろで得たもの——

森崎 民子

定年 それは近未来

勤め続けて三十余年。数年前になるが、年金相談センターに出かけた。六十歳の定年まで働いて幾らの公的年金が入るのかを頭に入れておこうと思ったためである。長姉が定年を迎え年金暮らしになったので、気になったのかもしれない。

今の会社は四度目の転職先で、地元の中小企業である。説明をしてくれた相談員は二度目の会社（その道では大手）を辞めなければよかったのにと、数字を見ながら親切心から言った。「寄らば大樹の陰」とはいえ、老後の年金を考えて仕事を決めるわけにはいかない。女ひとり、暮らしていければいい、とこれまで生きてきた。

しかし、ここ数年の金融・経済・労働の変化は著しく「この先やっていけるか不安」というのが正直なところだ。雀の涙の老後貯蓄もゼロに等しい金利では、楽しみどころではない。公務員だっ

た長姉は私に「あなたの給料、年金ではやっていけないよ」と確信を持って言う。だからといって、今さらではある。若いときは無理が利いてモーレッツ社員で働けた身体も、残念ながら今はガタが来ている。同級生の便りにも「身体と相談しながら勤めている」と書いてある。勤め続けているクラスメイトは公務員が多いが、ある意味で私は中小企業ゆえに、給料が安い分、大企業ほどの非情・無情のリストラに遭わずにすんでいるのかもしれない。しかし、退職者の補充はないので、仕事内容がハードになっていることは確かだ。定年が六十歳という線引きの賛否は一旦置くとして、おそらく「定年までは」との思いで友人たちもがんばっているのだろう。

テーマのきっかけ

「女と財産」をテーマにしたのは、身内のことになるが、専業主婦の次姉が病気をして、保険を掛けていなかった（わが国では生命保険の世帯加入率は九五％）のを知ったことと、「欲しいものがあれば、自分のお金で買えばよい」が通用しなかったのが、きっかけである。

「病気をするとは思わなかった」という元体育教師の過剰自信がそうさせたのか、夫が被爆者手帳を持っているため生命保険に加入できず、そのため配偶者医療特約の手も打てない。または自身に医療保険をかける経済的余裕がなかったのか、自由に使える自分のお金が少なく遠慮があるのか、おそらく諸々の理由なのだろう。友人にも専業主婦は大勢いるが、病気をしてお金がかかると「申し訳ない」気分になるのだろうか。つましく暮らしている姉は、病気による出費を余計に気にしているようだ。病気や不慮の災害・事故のために保険に入るのを自己防衛と考えていた私には、姉の

生活設計は驚きであった。

医療保険に頼らずに一生を終えられたらいいが、現実には難しい。「不時の出費に備えて貯蓄も忘れるな」と父から諭されていたので、医療費等は正当な使途には違いないが、ここで、自分名義のお金かどうかで、気持ちに余裕が分かれるのではなからうか。

結婚のコスト

〈あゝ九州〉の友人が紹介してくれた書籍を図書館で借りた。『女性の選択と家計貯蓄』（松浦克己・滋野由紀子著 郵政研究所研究叢書）で、カバーに書かれた「既婚女性はどの程度自分の財布・通帳を持っているのだろう」を、わが意を得たりと読んだ。同書「第一章 結婚のコスト——結婚を抑制するもの」の中で、晩婚化・非婚化の動きを追い、続いて「とくに女性の場合には家事労働の負担や就業機会の抑制による生涯所得の低下等、結婚のコストの問題は大きい（八代「一九九三」参照）」と紹介している。そして「豊かで自立可能な時代には、夫婦それぞれの財布・通帳も必要である」にもかかわらず、「独身時代には開設していた預金口座の閉鎖やあるいは生活費への充当などにより、独身時代の金融資産蓄積が減少してしまう可能性がある」とし、「①金融資産（＝預貯金＋有価証券＋保険）②預金③有価証券④保険」のデータから、「既婚女性の金融資産の保有・蓄積は独身女性のケースを下回っている」と結論している。

婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立するものであり、経済的コストで計測するには異論もあるかと思う。それとも、そう考える私が古い世代になってしまったのだろうか。異議を唱えなが

ら、私自身が結婚のコストを計算していたのかもしれないと微笑笑している。

四十代半ばで結婚した友人がいる。その友人に別の友人が「お仕事はお辞めになるのですか？」と尋ねた。すると彼女は結婚したばかりにもかかわらず「いいえ。たとえ結婚（生活）はやめても、仕事は続けます」と、笑って応えた。偕老同穴の契りを結んだとしても、生身の人間。自分のほうから別れたくなる時が来るかもしれない。その時、生活力がなければ不本意なその後を送らざるを得ないだろう。その意味で、働きつづけて経済力をもつことは、精神的に豊かに生きることに通じる。

財産に代わる宝物

今日、世界は経済最優先で「そのけそのけ」の感があるが、女は果たして何%の経済を握っているのだろうか。富の分配がひどく偏っていて、その差は開くばかりなので、正当な言い分が通らない。いろんな国際会議を見ても、大国が自国経済界のしもべのごとき発言をして言い張るので、まとまる話もまとまらない。

もし、女の経済力が格段に上がったなら、ジェンダーの視点が開けて、地球規模での調和がとれるだろうか。労働の対価としての賃金でさえ、「女」というだけで輪をかけた差別となっているのは、日本のあちこちで男女賃金差別裁判が起こされているのを見ても明らかである。とくにここ数年の経済不況下では、弱い立場の女性や中年が先に失業の憂き目を見ている。生きる権利は性別年齢には関係ないはずなのに。「つらい一言は『お金がない』（二月二十二日朝日新聞「声」）のような「お金がなければ生きられない」そんな世の中には断じてしたくないものだ。

わが身を振り返れば、女の細腕で生きて来られたこれまでが恵まれていたのかどうか。決して独身貴族という身分ではなかったが、私は（あごろ）とその友人を通じて、考え方も生き方も刺激され、より強くなったと感謝している。

姉が（あごろ）を知っていたら、辞めずに教職を続けていただろうか。それとも、今と同じ道をたどっているだろうか。千人いれば千人の生き方がある。その多様性はそれゆえに尊重されなければならない。姉が退職を安易に決めたとは思わないが、母が逝ったその年の大変な生活の中から、姉を東京（短大）へ進学させた父は、「辞めなければいいものを」と残念がったそつだ。

凡人の志

「女と財産」で起こした稿だが、私の力量では入口までにもたどり着けなかった。

理想論を言うつもりはないが、経済力を持つことは自立の第一歩。結婚もして、子育てもして、自分名義の通帳や財産は、しっかりと堂々と持ち続ける。そのためには「女だから」の一点で不平等に知識や労働を安く買われたくないし、売りたいもない。

この四月から始まる「ペイオフ」も、悲しいかな、幸いかな、悩むこともなく春風の如しといえ、貧乏人の負け惜しみに聞こえるだろうか。ニュースでは人の道を外れた政治がらみのあくどさ（犯罪）で億のお金が動いている。その意味で「カネは魔物」であり、扱いにくい代物である。お金にまつわる諺の多くも「金の切れ目が縁の切れ目」とか「地獄の沙汰も金次第」等々、反面教師にはなっても嫌なものだ。

商売人だった父は、生前「生きた金を使え」とよく言った。無駄遣いや浪費はお金のありがたさを知らない使い方で、額に汗して手に入れたお金は、生かしてこそ真価が問われる、ということをお教えたかったのだろう。その対語が「捨て金」「死に金」「泡銭」だろう。父の教えを実践することはなかなか難しいが、時々には思い出して生きようと思う。

財を築くなどもちろん縁遠く、贅沢する気もさらさらないが、この世に生を受けた者として少しは人のお役にも立ち、真つ当に生きる志はもち続けたい。

あごろで未来が…

すでに十年以上前になるが、賀状で「あごろで未来が開けたら…」とこあいさつをしたことがある。〈あごろ〉の宣伝を兼ねて出したのだが、何よりも私自身が〈あごろ〉に支えられた。幾つものサークルに籍をおき気ままに生きてきたが、中でも〈あごろ九州〉のみなさんとのつきあいは「襟を正して接する」貴重な時間である。そこには「仰ぎ見る何か」がいつもあり、密かな喜びであったことを白状する。この縁はお金では買えない宝であり、貴重な財産となっている。〈あごろ九州〉二十五周年にあたり、心よりお礼を申し上げたい。謝謝。



〈あこら〉との出会い三十年

——ジェンダーの視点に目を開かれて

小島 サカエ

雑誌『あこら』を私が初めて読んだのは、実家の母の部屋でだった。何げなく読むうちに、子育て中の主婦の私にも、じわっと惹きつけられるものが伝わってきたのを鮮明に思い出す。私が〈あこら〉に関わってすでに三十年。

〈あこら〉創立から五年後の一九七七年（昭和五十二年）一月二八日、九州福岡の地に〈あこら九州〉が誕生。今年で二十五周年を迎える。沈没せずによくここまでできた感慨深い。

思い起こせば、あのころの世相は、昨今と異なり、まだ女性（婦人）問題という言葉自体、殊に地方では耳にすることも、ほとんどなかった。「あの人は、婦人運動とかいうのを、しごきあげな、すこかねえ！」と感嘆の中にも揶揄めいた言葉や奇異の視線を浴びるのは日常で、落ち込むこともしばしばだった。しかし最近ではメンバーが少人数で高齢化したにもかかわらず、信頼された老舗の感じで、若人の入会を期待している。

さて、〈あこら九州〉の仲間と月二回（現在は一回）、話し合ったり学び合うことで、気分をリフレ

ツシユ、勇氣をもらったものである。私自身、無意識に長年なんとなくらわれていたものを少しずつ薄紙をはぐように、やがて身軽に解き放たれていく自分に会っていったように思う。今思えばジエスターフリーの視点をいつのまにか身に付けたのかもしれない。真剣に取り組めば取り組むほど、かなりしんどいものだった。目に見えない意識の問題は、いつも変革の一大テーマだ。

学習と行動の相互作用

『あいら』三号「主婦の解放をめぐつて」は、蛸壺状態に陥りがちな主婦へ、また九号「働く女と主婦の接点を求めて」は、双方分断されがちな両者へのメッセージであり、主婦である私にとって新鮮なものだった。十号「女と法」、十五号「職場の中の女性差別」は、現在も続く重要な問題だが、働く女たちに大きな勇氣や指針を与えた。

拠点では、学習と実践との相互作用で、地道ながら一步一步、メンバーたちが実力を蓄積していくさまが感じられる。教養を付けるというのではなく、それぞれが抱える自分自身のこと、現実に関すること、家族のことなど、内なるものからの気迫は「生涯学習」とはまさにこれだと思った。だが、行政が取り組む「生涯学習」には、納得のいくものが少なく、残念である。

二〇号「広がる女性解放と男女雇用平等法」、二二号「男女平等と母性保障」では、女の生命を守るとりでの正念場だ、と〈あいら九州〉のメンバーは、母性保障を拡充し、実効性ある男女平等法を求めて運動を展開した。粉雪舞う福岡天神の繁華街で寒さと緊張に震えながら、チラシを配り、道行く人たちへ訴えた。顔には、博多^{にわか}仁輪加のお面をつけ、毛糸の帽子をかぶっていた。勤務先からの圧

力を避けるためと、大勢の人たちに関心を喚起するアイデアであった。街頭での最初の実践行動だったので忘れられない。

また、二八号「産む産まない産めない」で、殊に身近な問題として「優生保護法改正」の何たるか、優生思想そのものが差別構造そのものの深さであることを学習していたため、ある団体が福岡県議会へ「優生保護法改正を推進する意見書」を提出するとの情報が入り、緊急事態に即応して、ネットワーク（福岡女性（婦人）団体交流会）を始め、他グループと連携し、結局「改正」意見書」提出を見送らせる原動力になった。

これらは学習と実践の一例だが、双方行えば相互に血が通い、生き生きとしたものになる。互いにネットワークを、そして行動することが大事というのが「行なうは難し」である。しかしグループそれぞれの自由は大切にしようと思う。とかく「正義はわれにあり」と思いがちだが、「人は間違いを犯しやすいもの」と自戒し、運動が分断されないよう心がけて、ここまでこられたことは幸いといえよう。

「世界女性会議NGO」へ

十二号「メキシコの会議と世界行動計画」をはじめ、二三号「女たちはいま変わる」はコペンハーゲンでの世界女性会議、三三号「ナイロビが語りかけるもの」、そして北京会議（第四回世界女性会議）など、国連と一体となったNGOの力をマスメディアがほとんど取り上げないときから詳細に伝えてきた（あごろ）は、一貫して情報発信の騎手である。また自分たちでワークショップを開き、単なるメディアとは違う活動グループでもあることを如実に表している。参加することで世界の女性た

ちとつながっていることを直接肌で感じ取る。この〈あごろ〉の活動と情報発信は、その後の生き方、活動にも計り知れないほどの実りをもたらした。今は亡き白井博子さんはじめ多くの方がたの「地の塩」のご尽力のおかげであると深く心に刻み、これからも歩んでいきたいと思う。

すべてに優先する平和

この頃、とみに「いつか来た道」に逆戻りしそうな平和への危惧を覚えるが、二四号「女と戦争」、二七号「いま平和を支える」等々、次つぎに書籍にも劣らない内容で〈あごろ〉は平和に向けての努力を訴え続けてきた。すべてに優先する平和を私たちは生命をかけて守り抜かねばならないと思う。

二〇〇一年九月十一日のニューヨークでのテロ事件にショックを受けたが、私たちは早速「テロも戦争も反対。国際法の裁判で解決しよう!」「子供たちに残そう、戦争のない平和な世界を」と、他のグループと一緒に街頭でチラシを配り、マイクでアピールをした。

小さな努力ではあるが、平和は常に「意識化」して取り組まねばならないと思う。戦争を賛美する雑誌などには不快にはなるが、読んでみて「敵を知り己を知らば百戦危うからず」、不当な抵抗勢力を阻むための戦略を構築する必要も考えさせられる。

福岡セクシユアル・ハラスメント裁判

一九九二年四月十六日は、歴史に残る「職場での性的いやがらせ裁判」の初勝利となり、日本の働

く女たちに勇気を与える記念すべきものになった。一四七号「セクシユアル・ハラスメント福岡報告」、一五二号「セクシユアル・ハラスメント」にも記載されているが、「職場の『常識』が変わる 福岡セクシユアル・ハラスメント裁判」(インパクト出版会)の中でも、原告A子さんが「(あごろ九州)のメンバーが支援する会として、強力な組織となった」と書いている。

メディア規制、立法化を防ぎ、今こそ真の「情報」を守ろう

最近、メディア全体の規制につながる法案が相次いで国会に提出されているが、その背景には事件報道など、市民への過剰な取材や裏づけもなく報道されることがあるためではなからうか。原告A子さんをマスコミから守るために、当時大変な努力が払われたことを思い出す。この号の「めじゃーなりすとのめ」に室田康子さんが書いているように、マスコミ全体にジェンダーの視点が求められているのだ。

メディア全体が真の情報のルールづくりを自らがしなければ、自由と人権を守るべきメディアが公権力に屈して禍根を残すことになる。

今国会での「個人情報保護法案」「人権擁護保護法案」の成立を阻止するために、(あごろ)も立ち上がる。マスコミともスクラムを組んで、自由と人権を守るため、真の「情報」を守るための警鐘を鳴らそう。



読書室

- 『歴史の中のジェンダー』
- 『ジェンダーの社会学』
- 『ライブラリ相関社会科学2
ジェンダー』
- 『ジェンダー 女と男の世界』
- 『ジェンダー秩序』

■ M・ペロー、G・デュビイ、網野善彦、

河野信子ほか

『歴史の中のジェンダー』

政変や戦乱で繋ぐ事件の歴史は、ほとんどの場合その主体は男性であり、政治の仕組や事件の原因・結果の探求が歴史の面白さと考え、登場人物の大部分が男性であることに、

歴史の中のジェンダー

「女と男の関係」
で結ぶ
日本史と西洋史

これまで何の疑問も抱くことがなかった。一方、女性が中心に登場す

る女性史は、抑圧から解放される歩みを中心に描かれたものが多く、その時、男性はどうしていたのかは曖昧であった。

そんな時代にも、どんな社会でも女と男は共に生きてきた以上、その関係を対象とした研究こそが、時代と社会を捉える新しい鍵として編集された『女と男の時空—日本女性史再考—』全六巻が藤原書店から刊行された。

本書は、この編集の過程で執筆者たちが自身のテーマをさらに掘り下げるための論考や関連のシンポジウムにおける討議の記録、加えて執筆者以外からも寄せられた適切なコメント等をも収めたジェンダー論である。

全体を二部構成のもと、第一部は「女と男の関係史」の方法論を巡って、とあり、そもそも「女性史を書く」とは—変革に参加すること、冒頭のミシェル・ペロー女史の一文に続いて、フランスの歴史学の主流と

も言われるアナール派と女性史についてのコメント。

さらに網野善彦「日本の特異性を捉えた女性史を」と続く。日本女性史再考を目指す意欲に溢れた方法論を巡る論集である。いずれも四五頁のエッセンシャルな論考は、ジェンダーの視点から歴史学の地平をひらく刺激的な手法を提示している。

第二部は、「女と男の関係史の諸相」としてその多面性を示している。これまでの女性史から欠落していた沖縄・アイヌを取り込んだ「地域と国家」。ヨーロッパ女性史との共通性と日本の特異性を描いた「家・婚姻と労働」の諸相。時代を越えて関係存在として女と男を扱う「性と生」。「ことば・文学」「宗教・心理」「イマージュ」等、論考は四〇編に及ぶ。

(四六判 368頁 2001年 藤原書店 本体8800円)

■ 江原由美子 長谷川公一ほか

『ジェンダーの社会学』

多くの大学や短大が一九九〇年代に「女性学」から「ジェンダー論」へと移る中で、本書がテキストとして使われている率は高い。版を重ねること二〇刷を越えた。初版は八〇年代の終わりであるから、ジェンダー論の、まさにさががけであった。ジェンダーという概念が「家族」の研究以外の場では今日ほど拡がっていない段階で、問題の包括性をテキストの形で解りやすく示したことが高い評価につながったいわれであろう。



社会学が、面白い、魅力的な世界と知ってもらう入門書。しかもジェンダーという視点に限定して書くという狙いで、社会学者たちがそれぞれの専門分野を担当して具体的

に豊富な例証によってジェンダーとは何？と問い掛ける。

面白くなければ読まない。読まなければ啓発材料にはなり得ない。その点からも啓発的な入門書として成功している。

テーマの選び方、各章毎に設けられている研究ノート、参考文献、さらにキーワードの解説も施されている。気配りも行き届いている。

さて、内容を掲げよう。

第一章 日常生活とジェンダー。

朝の目覚めに始まって、食事、通勤、職場で。帰宅してのくつろぎのひとつとき。そして夢の世界へ。一日の静かな日常を生きる周辺にジェンダーの問題は溢れている。様々な規範、制約を、新たなまなざしで視ることから、視界は広がり、深い思索が蓄えられていく。

第二章 政治社会とジェンダー

第三章 家族とジェンダー

第四章 労働とジェンダー

第五章 世界社会とジェンダー

第六章 感性リアリティとジェンダー

ダ

一章ごとに六―七項目のサブテーマが付され、つい惹かれて関心を持つ、という狙いにそってひと工夫された入門書としてお勧めの一冊である。

(A5判 264頁 1989年 新曜社 本体2330円)

■ 原ひろ子、大沢真理、丸山真人、山本泰編
『ライブラリ相関社会科学2』

ジェンダー

ライブラリ相関社会科学というシリーズの二冊目。原ひろ子氏の序文によれば、これまで近代の学問研究が、あまりに「ジェンダー無視」であつたことを



反省し、その上で新たな手法を作り上げるために(労働

働・経済〉〈政治〉〈文化・社会〉〈開発〉の四分野にわけ、それぞれの領域で四六編、合計二〇人の研究者がそれぞれのテーマに関して最もふさわしいと自らが判断する方法を駆使して試論を展開している。

相関社会科学は、読んで字のごとく、統合された一個の学問体系ではなく、むしろ複数のモデル、方法、ディシプリンが交流し、互いに触発し合う場を共有する。

本書のメインテーマである「ジェンダー」は、相関社会科学の場に最適のものとして豊富な内容は四百頁に余る。

最初に掲げられた論文は大沢真理氏の「日本の社会科学とジェンダー」。

筆者はアメリカのデューク大学歴史学部主催の学会に招かれて労働運動史の研究部会で日本に関する報告者として発表した経験から、先ずア

メリカの労働史学の現状に触れ、それに対比してジェンダー無視の現代日本社会論を問題提起し、現代日本社会の在り方を批判的に分析している。

一九九二年六月、宮沢内閣は「生活大国五カ年計画」を発表し、経済成長よりも個人の生活の尊重を基本方針としたが、政府は政策責任を果たしていない。

というのは、強固なジェンダー関係こそが日本の企業中心社会の基軸にあるという問題が、視野の外に置かれていたためである。

この重要な指摘には答えず、政府は個人や企業の価値観の転換だけを負わせて、自らの政策の責任を取っていない。

その明らかなマイナスイメージとして、福祉を閉め出す社会政策論、女性を「特殊」と見なす労働研究、の二つの点をあげている。

まさに相関社会科学にふさわしい〈労働・経済〉と政治との相関を例示した好論文と言える。

〈政治〉の分野では、館かおる「女性の参政権とジェンダー」、〈文化・社会〉の分野では、柏木恵子「性差の由来」、〈開発〉の分野では村松安子「開発と女性領域における女性の役割観の変遷」等の論文が続く。

(A5判 408頁 1994年 新世社 本体2,600円)

■I・イリイチ 玉野井芳郎訳

『ジェンダー——女と男の世界——』
「産業社会は二つの神話を作りだす。一つは、この社会の性的系譜であり、もう一つは、この社会に特有な平等を求める運動についてである……」

この文章に

始まる『ジェ



ンダー』はI

・イリイチ

による『シャド

ウ・ワーク』と並ぶ代表作である。

現代の社会に危機感を深める彼の主要な論点は、ヴァナキュラーなジェンダーの喪失こそが資本主義の勃興にとって、また産業的に生産される諸商品の中に没入するライフ・スタイルにとって、決定的な条件になっている、と述べる。

彼の言う「ジェンダー」とは何か。「ヴァナキュラーな」とは何か。

常に二元的な地域に固有な物的な文化と、ジェンダーの原則の下に生きる男と女の間のかかわりを反映するものをヴァナキュラーなジェンダーとするならば、一方の社会的セックスは、十八世紀に始まって全人類の属性とされるあの共通の特性、即ち労働力、生命力（リビドー）、性格、知性などを分極化させる。ヴァナキュラーなジェンダーの優位からセックス優位への移行は、先例のない人間的条件の変化である、と。

この文明観に立つて、彼はジェンダー論を展開する。

女と男は代替不可能な特性を持つ。左手と右手が異なる機能を備えるに似て、ジェンダーは解き難く非対照的であり、その相互補完性を現わす。

例えば、この「非対照的補完性」について「右と左」「陰と陽」「性役割」について等々。この著作の文脈における用語一二五項目のほとんど総てに精緻な解説が繰り広げられる。

含意の深さ、豊穣な思考のなかに、哲学、歴史学、文化人類学等の広い領域をカバーしたイリイチ独自のジェンダーの世界がひろがる。

章立て、活字の大小、組み方にまで配慮して、さながら辞典をひもとくがごとく自らの思想に読者を近づけ、その誤解と魅力の虜にしてしまうジェンダー論は、時としてヨロ

ッパの学の原点に引き戻す魔力を備えている。

（四六判 429頁 1998年 岩波書店 本体2800円）

■江原由美子

『ジェンダー秩序』

ジェンダーという概念は、「男女の性差が、生まれながらの性別によるものでなく社会的文化的に形作られた相違」とみる従来の定説も、仮説に過ぎず、また観察可能な男女の行動を生物学上の相違と捉えることも固定観念での決めつけとみる。同様にジェンダー研究を行なう者も「男らしさ」「女らしさ」を思い込みで捉えようとすることに抵抗感を免れない。



著者は、この相違の本質に迫ろうと、多くの学説を援用しながら理論

化を進めていく。難解ではあるが読み進むうちにこれまでの疑問や曖昧さが氷解していく不思議な力を持った一書である。

「性差」のありかを求めようとすれば、それは「心」ではなく「心」にかかわるふるまい」にあるのではないか、と推論する。

この推論からスタートして、先ず私たちの社会的行為を可能とするために、その意図、条件、手段を持つ必要がある。しかし、それだけでは不十分であり、他者がその行為に対してどのように「心にかかわる行為」によって受け止めるかに依存している。この社会的相互作用は、行為能力の相違によって支配の関係が生まれる。ということとは、ジェンダーもまた権力を内包している。男、女というジェンダー化された主体があるのではなく、男、女としてジェンダー化されることと支配は同時に進行する。

つまりジェンダーは本質ではなく社会的構築物なのである、と著者は説明する。個人が社会関係を持つ上の相互依存性においてどのような支配が生じるのか。

性別にかかわる支配として性別分業と異性愛という支配が生じる。これをジェンダー秩序と定義付ける。

私たちは社会生活を送る上で多様な社会的場面に遭遇するが、これは単なる物理的空間とは違って人間の諸活動の文脈として把握される。つまり諸活動の構造的特性や規則的パターンをジェンダー体制と位置づけている。

ジェンダー秩序は概念であり、ジェンダー体制は構造パターンである、として、果たしてこれらがどのような時間経過の中で形成されていくのかという点に納得が得られないのは、社会学の限界であろうか。

(四六判 464頁 2001年 新世社 本体3500円)

映画「軍隊をすてた国・コスタリカ」上映会+講演会

日時 2002年5月6日(月) 13時~20時

場所 国立青少年オリンピック記念総合センターカルチャー棟小ホール

参加費 一般1,300円 / 大・高生1,000円(懇親会費2,000円)

動植物の宝庫、軍隊をすてた国、コスタリカ。そこにはどんな社会があるのだろうか。

音楽と踊りがコスタリカの現実に交錯するドキュメンタリー。

プログラム

◇ 映画「軍隊をすてた国」上映 ◇ 制作者挨拶・早乙女愛ほか ◇ ピアノ演奏・うた

◇ 講演「軍隊をすてた国コスタリカ」 カロス・バルガス氏

●問い合わせ先 実行委員会事務局 児玉法律事務所 Tel.03(3535)2754

新聞にジェンダーの視点を取り込む

室田 康子

(朝日新聞紙面委員)

新聞社で働いて二十二年になる。社会部や学芸部、週刊誌の編集部などで、記事を書いたり、編集をしたりしてきた。いまは、印刷する直前の新聞全般を見て、表現や視点がおかしくないか、記事の大きさや見出しは適切か、などをチェックする仕事をしている。

読者に近い目線で、「少数派」を意識しながら、体制に寄り添うよりは批判者として、新聞に注文する存在でありたいと思っている。男性が圧倒的に多く、男性論理が支配する新聞の現状では、「まだこんな表現が」と驚く記事が少なくない。落ちていくテーマもある。それらに気づくには、私自身が女であること、必ずしも新聞社の中で主流を歩いてこなかったことが、役に立っていると思っている。反面、そうはいっても、長い間に身についてしまった自分の「鈍感さ」にも、謙虚でなければと自戒している。

最近、直面した「まだこんな」の例をあげてみる。たとえばソルトレーク五輪の記事。アイスホッケー女子カナダチームの主力選手を紹介するのに、男性の超有名選手になぞらえて「女性版○○○」と書く。しかも見出しは「ママさん選手」。また、モーグルで銅メダルを取った里谷多英選手のヒューマン・ストーリーに、「男子顔負けの滑り」「小さいころから父親から『女みたいな滑りはするな』と言われ続けた」の表現。スポーツ部のデスクに、「男と比べる必要はない。彼女はすばらしいと言うだけで十分」「男性の五輪選手に、パパさん選手とはいわないだろう」と改善を求める。見出しなどは直ったが、降版間際ゆえ、記事の構成にかかわる場合は、あまり変わらない。

田中前外相と鈴木宗男議員が「対決」した国会の参考人招致の解説記事。見出しは、「牙をむく真紀子前外相」。ヒステリックな印象で悪意が感じられると、直しを求める。政治部からは「これが実感」と抵抗されるが、「冷静に」と説得。「牙をむく」は「矢放つ」に変わった。

日韓の電器メーカーが洗濯機やエアコン生産で協力、という記事に「白物家電」の見出し。「白

物」は業界用語だ。「日常生活で使わない言葉を一画トップで使うのはどうか」と変更を求める。だが、経済部は直さずに、「白物家電とは」というメモ記事をつけてきた。ガツクリ。

一方、気づかなかった、思いがいたらなかった、ということもたくさんある。

昨年末、オランダ・ハーグで慰安婦制度をめぐる女性国際戦犯法廷の最終判決が出た。「旧軍幹部に有罪」の見出しに、「焦点は天皇の責任のはず」と思いながら、記事の前文に天皇についての記述はない。中ほどになって「昭和天皇についても『国の最高責任者として十分な措置をとらなかった』として有罪」と出てきたが……。前文に入れるよう書き直してもらい、見出しも変えるべきだった。案の定、読者から「書き方がおかしい」とクレームがきた。

皇室関連記事の扱いでは、迷うことが多い。天皇制がジェンダーと深くかかわっていることを認識しつつも、いろんな考えを持つ人がおり、読者の関心が高いテーマであることは事実だ。二月、皇太子の誕生日にちなんで、「すくすく敬宮愛子さま」の大きな写真が一面に出てきた。これはニュースなのだろうか……。皇太子が子育てにかかわっているらしいというので、「皇太子が抱いている写真を社会面で」と提案してみる。が、変わらなかった。

新聞の中のジェンダーについては、朝日新聞の第三者機関である「報道と人権委員会」（私は事務局を務めている）で論議し、紙面化した（二〇〇二年二月一〇日付）。朝日では、死亡記事の敬称を男性は「氏」、女性を「さん」としているが、『さん』に統一を」と提言され、「取り決めた集改定に向けてジェンダーの議論を」と求められた。社内での関心を高めて、実現につなげたい。その際、内からの動きと同じぐらい、いやもつと、読者の方の応援が大きな力になる。新聞をお読みになって、おかしいと思われること、こうなればいいと思うことを、ぜひお寄せいただけたらうれしい。

追悼

広田寿子さん

御礼



広田
純

退官後、お二人で1か月間の海外
旅行を共にされた。トレドにて

先般、故広田寿子の葬儀に際しましては、多くの方が年明けのお忙しい時期であるにもかかわらず、お別れにおいでくださいました。遠くからおいでくださった方も、いらつしやると伺っております。誠にありがとうございます。感謝しながら旅立っていったことでしょう。重ねてお礼を申し上げます。

長くて、苦しい闘病生活でしたので、所沢駅でおきた事故とその後の経過については、今日までご報告する余裕がありませんでした。誠に申し訳ありません。

昨年の五月二四日、その日は雨でしたが、都心であったクラス会に出席した寿子は、池袋から西武線に乗って、所沢で新所沢方面の電車に乗り換えようとしたが、降りの階段で転倒して、出血がひどく、救急車で防衛医大病院に運ばれました。

この転倒事故については、いろいろ不明の点があります。第一に、寿子は池袋で特急に乗って所沢で下りたところまではよく憶えていましたが、転倒事故の前後の記憶は完全に欠落していました。第二に、負傷の部位ですが、後頭部にはひどい裂傷があるにもかかわらず、顔にはかすり傷ひとつありませんでした。これは降りの階段でうしろから押されてできるような傷ではありません。ひよつとすると、乗り換えの時点では、寿子はすでに意識を失っていてそれが転倒事故の本当の原因ではないか。

事故の目撃者の証言も、この推測と完全に一致します。そのお一人は、以下のように証言されました。「あの人は疲れたのか、階段の踊り場にこしかけて休んでいました。私は先に下まで降りましたが、その時あの人が仰向けになつて、頭を下にして、落ちてこられました。」

六月三十日、主治医から「胸部動脈瘤」があるという事実を、はじめて知らされました。それと同時に、心臓の手

術は約九時間を要するような大がかりな手術であるということ、また患者の年齢その他の状況を考えるとリスクの大きな選択であるということを強調されました。私はショックでしたが、同時に、目から鱗がおちるような気持ちでした。転倒事故の背後にある本当の原因は、「胸部動脈瘤」による心身喪失ではなかったのか。

それから一週間ほど経った七月六日、「穿骨ドレーナージュ術」という手術をうけました。これは頭の骨に小さな穴をあけて、ドロドロした血を吸い出す手術で、脳圧を下げるために、脳外科で一般的に行われる手術のようです。決定が一週間近く遅れたということ自体、問題の複雑さを物語っていると思います。

この手術のせいか、寿子は一時的に元気になって、歩行器にすがって、自力で廊下を移動できるようになりました。このような状況になれば、救急病院としては、ベッドを確保するために退院勧告を出さざるをえません。

八月三十一日、防衛医大病院を退院いたしました。それ以降、九月、十月の二か月間、在宅療養の生活に入りました。十一月八日、寿子が背中中の異常な痛みを訴えましたので、近くのクリニックに連れていきましたところ、「胸部動脈瘤」が大きくなっているのです、これ以上の在宅療養は危険

であると言われました。急遽二回目の救急車で、石心会狭山病院に入院いたしました。動脈瘤は約八センチ程大きくなっていたようです。防衛医大の時とまったく同じ理由で、手術はできないから、内科的手法で対応すると決定されました。内科的手法とは、酸素吸入とか、血圧のコントロールとかで、動脈瘤の破裂をできるだけ先に延ばす、いわば一種の対症療法です。十二月三日、主治医がはじめて退院の可能性についてふれました。医学的条件だけからいえば、あと一週間位で退院可能であると。先の見えない退院で、複雑な気持ちでしたが、それでも寿子は久しぶりに我が家へ帰れるというので、どの服を着て帰ろうかな等と、少し浮きうきしていました。十二月二十七日、狭山病院を退院いたしました。

帰宅後二階に昇れるかどうか、心配しましたが、ヘルパーさんに援けられて、一気に昇れました。食欲もあつて、お正月には切餅を食べたいと申しました。さすがにお餅は体の方が受け付けてくれませんでした。

今年の一月七日、いつものように二人で夕食をとろうとしましたが、寿子は吐き気がひどくて、食べたものをみんな吐き出しました。そんな状況から、おそらく寿子は死期の近いことを予感したのでしょう。私の顔を見つめて、何

か言おうとしましたが、声がかすれて言葉にはなりません。おそらく寿子は「ごめんね」と言おうとしたのだと思います。忘れようにも忘れられない最期の瞬間でした。

医師の死亡診断書によれば、死因は胸部大動脈瘤の解離、八二年と七日の生涯でした。

長くて苦しい闘病生活の間、多くの方の損得をぬきにしたご援助に支えられました。

寿子の生き方に共感して、実の母のように慕って下さった教え子の皆さん、私たち二人に共通の古くからの友人の皆さん、医療関係者・社会福祉関係者の皆さん、さらにこの緑町で共に生活してきたご近所の皆さん。誠に有難うございました。改めて厚くお礼を申し上げます。

(会葬者へのお礼状を転載させて頂きました)



● 広田寿子さんのご著書の一部

ご略歴 1921年 大連市生まれ。
1941年日本女子大学校国文学部卒業。
1951年東京大学経済学部を卒業後、
労働省に勤務。1966年より89年まで、
日本女子大学家政学部家政経済学科で、
教育・研究に従事、生活経済、女子労働問題等を担当。

失つて改めて知る大きさ

斎藤千代

一月十日前、一枚のFAXが届いた。

所沢の宝、広田先生が…… 今日一時半、ご自宅でご葬儀…… 丸山光子さんからのお知らせだった。

それからどのようにして所沢にたどりついたのか、ほとんど記憶がない。場違いのエンジのコートを着ていることも、ポケットに百円しかないことも、着いてから気がついたこと。頭の中が真っ白になったり真っ黒になったり。ただ、ああ、ああ、ああと、大声で叫びたい気持ち。

去年の五月。いつも『あごろ』が良いにつけ悪いにつけ、すぐお電話下さる広田さんから、長いお電話があった。

「いま創刊号から、一冊一冊読み返して感動している。ぜひとも復刻版をおつくりなさい。全部が無理なら、これだけは、というものに印をつけます」

あのお忙しい広田さんが、何というありがたいことを、と感激して、さっそく何人もの方にこのお話を伝えたが、「岩波に執筆中で、それが終わるまでは忙しい」とのお言葉に、ご連絡を遠慮していた。いま考えてみると、事故に遭われたのは、そのお電話から数日後のことのよう。事故のことも、

ご入院のことも、お弱りになったことも、何一つ知らなかったとは――。

広田さんは（あごろ）創刊の時から会員で、お名前は存じ上げていたが、長い間、お目にかかったことはなかった。

折にふれ、鋭い、しかし温かいご批評を頂いて、感謝していた。

その広田さんが身近になったのは、高橋美保さんから、

「広田先生は、斎藤さんにすごく感じが似ている方です」とうかがってからではないだろうか。似ているなどとてもない。もったいないことだが、その後まもなくお目にかかつて、ふしぎな親近感を抱いた。業績も人格も雲泥の差だが、志すところで、ピタツと一致する部分がある。だから全身の力を抜いてお話しできる。そんな印象だった。大きな、やさしい先輩は、気がついた時には私の心の中の一歩深い部分に、ゆったり住んでいらした。

訃報は教え子の何人か以外にはお伝えにならなかったそうで、ご自宅のお庭を埋めていたのは、ほとんど日本女子大のご卒業生のようなだった。葬儀委員長もなく、無宗教のお式は、いかにも広田さんらしく、お棺の中の広田さんは、呼べば「はい」と答えてくださりそうなお若さに見えた。

七日の夜、お夕食を共になさりながら旅立たれた後、おつれあいの純先生は、どなたにも知らせず、二夜、ベッドを共

にされたとうかがって涙が出たが、その分、ご衝撃は深く、今も、ぬけがらのようにしておられる。

東大時代の大親友、久保まち子さんは、葬場での待ち時間、様ざまなエピソードで私たちを笑わせ続けて悲しみをまぎらせてくださったが、その後、ご体調を崩された由。この号の追悼のお言葉も頂戴できなかった。

私も何週間か、夢遊病者のように過ごした。失ってその大きさを改めて知る、かけがえのない方だった。

広田先生との三六年

吉本洋子

先生が労働省から日本女子大家政学部家政経済学科に移られた年に入学した私は、「女子労働論」の広田ゼミに入りました。生活問題を学ぶ学科でしたが、当時四十代半ばで大陸育ちの先生は、高度経済成長期をへて変化した昭和四十年代前半当時の暮らし（核家族・住宅ローン・病院出産など）を戦前の満州ですでに経験された方でした。学歴・職歴も時代の最先端にあり、その考え方・生き方に刺激を受けました。

私が四年の秋、乳癌に罹られたのですが、先生の許可を

得てとは言え、卒論の下書を持って病院へ伺ったことなど、今では冷や汗ものです。「生き抜く力を付けなさい」という先生の言葉を重く受けとめて、果立った我々でした。

卒業後もご指導を仰いでおりましたが、先生との新たな深い繋がりは、十七年前に卒業生で作った読書会が、取り上げる本のアドバイスを先生に求めたことからでした。勧められて『講座・女の一生Ⅰ・現代と女性』（岩波書店）を最初に取り上げ、感想をお送りすると、必ずお返事を下さいました。その後も毎回の読書会報告をお送りしておりました。

十四年前に退職されて大学でお目にかかれなくなっただけもあり、夏に先生のお宅へ読書会員として伺わせていただくことが恒例となっていました。先生は個々人の生きてきた時代を語り伝えていくことの大切さを、ご自分の体験を話すことで伝えようとされました。毎年、前年の続きを意識して、自分史を話して下さっていたのです。そのうち、卒業生が退職時に贈ったワープロが大活躍を始め、同じ頃お母様の遺稿も見つかり、夏の集まりにセピア色に交じったザラ紙に書かれたお母様の文章を読んで下さいました。参加者は、「それをまとめて出版されることを是非に」と、提案したのでした。我々にも年上の近親者などの話を聞いて、書き残すことを勧められました。

六年前の初夏、読書会のメンバーから「皆さんで読んでみていただけますか」と、届いたものがありました。当時、実働メンバーは三人になっていたのですが、ワープロで打ち製本したものが先生から送られてきて、三人の感想を求められたのでした。届くやいなや読み始め、明け方に読み終わりました。この一年の間に、お母様の遺稿に娘としての先生の文章が加わっていきました。改めて先生の温かな人間性に触れた思いでした。その後、これが『女二代の百年』（岩波書店）となつて反響を呼ぶことになったのですが、この本の誕生経過をずっと見せていただけた我々の喜びも大きなものでした。敢えて言えば、元の原稿から落ちた部分のあったことで、プライベートな話、生存者への配慮などがあつたのですが、その内容はさらに興味深いものでした。

三年ほど前から先生は、ライフワークの「女子労働論」を分かりやすくまとめ、岩波新書の一冊に加えるお仕事に取り掛かられました。その戦前編は『季刊保育問題研究』（一八五号）「働く女の百年とその背景」に発表されましたが、戦後部分に取り組んでおられました。

昨年、元旦に傘寿を迎えられたお祝いに、一月五日、「傘」を持って数人でお訪ねしました。学生時代に難病に

罹り、今も車椅子の生活を余儀なくされている教え子の住む富山で同窓会を開きましょう、と先生が提案されていたのですが、その時、岩波新書の原稿を書き上げ、暖かくなったら行きましょう、と話がまとまりました。

しかし昨年五月二十日にお電話をしたところ、「原稿は大体出来ているけど、もう少し手元で楽しみたい」「遠くまで行く元氣はなくなってきた」と話されました。そして四日後の入院となったのです。

病室でまず伺った「私は病氣ばかりして広田に迷惑をかけてきたから、最後は広田より長生きしなければいけないのよ。広田が天涯孤独になるから」という、子どものない先生の言葉は、同じ境遇の私には忘れられません。

病状とともに、岩波新書の完成が先生の気掛かりであることも心配でした。退院後の九月に、事故前日まで続けられた執筆中そのままの書齋で、「ここまで出来ているのよ」と打ち出した原稿を綴じたファイルを見せて下さいました。再執筆の可能性を願っていましたが、十一月には再入院となりました。そんな状況下でも我々の書いた論文などを待つて何うと、先生の目には力が出ました。

年明け早々の一月五日、三人そろって見舞いました。ご自宅でお正月を迎えたからか、先生は久し振りに穏やかな

お顔で、三人それぞれに励ましと感謝の言葉を頂きました。それがお目にかかった最後となりました。先生に相応しく聡明なままで、突然に。

私が中年から考古学の道に進んだ時、そうした生き方を認めて下さり、論文をお送りすると、「歴史を勉強するのなら今に生きる歴史をやるように」と、視野の狭い研究に陥るのを注意して下さいました。

学生時代もその後も、先生が見えて下さることを意識して生きてきたように思います。冷静で、しかし温かい「母親」を亡くしました。堪え難い悲しみです。ここ半年余りの間、辛いにも、年齢を重ねていくことと夫婦の最終章を静かに見守らせていただけなのですが、いつも「あなたたちにはまだ三十年あるわよ」と叱咤激励して下さいた先生の年齢までの自分の時間を、フルに大切にして生きていこうということが、私の今の気持ちです。

広田先生に 教わったこと

——海辺の町から

横山雅子

土曜のお昼前、市役所通りの小さな事務所に一人すわっている。六人掛けのダイニングセットを応接台に見立て、

デスクワーク三つ、事務機器、本棚——十坪ばかりのこの空間で、社会保険労務士の事務所をひらいている。九州西海岸の人口三万足らずのこの町で、中小零細事務所を主な顧客とし、自らも「吹けば飛ぶよな」個人企業主として、何とかつづれず、間もなく十年になろうとしている。世の中によやく週休二日制が根付いてき、土曜の事務所には電話も、来客もない。

どうしても片付かない仕事がある時、あるいはややこしい考え事をする時、土曜の朝おそく、一人、事務所の力ぎを開ける。

資格はとつたものの、実務経験なしの中年からのスタートだったので、それなりに必死で男社会の中を渡ってきた。ここ二、三年、ようやく身の丈に合った経営ができるようになり、出ずっぱりだった土曜日、自らの心身の健康を維持するため、休むようになった。

それでも、決算申告を控えたこの時期や、年に何回かある仕事上のトラブルを見直す時、病気の夫や高齢の母、独立した子どもたちとの距離をはかりなおす時、この事務所で土曜日、一人だけの時を持つようにしている。

その事務所の、私のデスクの右手には本棚があり、手の届くコーナーには仕事関係のファイル・資料が置いてあるのだが、左上隅の二段には、私だけの大切なコーナーがある。

そこには『あいら』や『We』『働く母の会ニュース』

バックナンバーと共に、広田寿子先生の著書が並んでいる。一九七九年の『現代女子労働の研究』、八五年『講座 現代女の一生―現代と女性』、九六年『女三代の百年』――さらには、先生に頼んでわざわざ取り寄せて送ってもらった戦研資料シリーズの調査報告書『大工業地帯における保育園児をもつ母親の職業とその背景』などが、背表紙もすり切れて、並んでいる。

その一つ一つを手にとつて表紙をあげ、扉に記された先生の筆跡と目付けをたしかめる。そして、広田先生との出会いと、これまでをふり返る。

*

私が先生と初めて出会つたのは二十代後半、子育てと生活をたてることに体当りでぶつかっていた頃、日本女子大学の通信教育部に送つた一通のレポートがきっかけであつた。

勉強が好きで、そのことを生かす道すじをつけてくれた親の期待に応じストリートに大学へすすんだものの、学生運動の波にぶちあたり、現実の社会を知らぬまま、無器用に家庭をもち生活をたてることに取り組んでいる最中であつた。大学を出るには出たが、仕事には就かず、その前に子どもが生まれるという、今思えばムチャクチャなスタートをし、年子で次つぎ生まれた子どもの世話で精一杯のあ

る日、高校の非常勤講師の職を得た。家庭科の選択科目「保育」を週二日受けもつことが、思えば私の職業生活の始まりであつた。そこから、日本女子大学通信教育部へのつながりが生まれた。

何をレポートに書き送ったか遠い記憶となつたが、通信教育部が、当時労働省から日本女子大学へ移られて女子労働の研究にあたつておられた広田先生へ、私のレポートを手渡して下さつた。初めての広田先生からのお手紙には、抜き刷りの研究論文が添えられており、家の裏口でオムツを洗つていてぬれた手をエプロンでふきながらお手紙を読んだ時には、涙があふれた。あの日のことが、今、映画の一コマのようによみがえってくる。

あれから、いく度となく手紙のやりとりがあり、お目にかかる機会があり、ご本や論文を出されるたびに贈つていただき、私からも感想を書き送つた。また、所沢のご自宅にも何度かおうかがいして、おいしいものをご馳走になりながら、いろんなお話をした。ご本からは窺い知れぬようなお話も聞かせていただいた。

*

二十代後半からおよそ四分の一世紀の時を重ねた広田先生とのつながりをふり返ると、私の生きた道のどこかで、

それも、問題にあたり悩み、苦しんでいる時、迷っている時、いつもどこかで先生に教わつたことを指針にしてきたように思う。「考えること」「労働すること」「社会性をもつこと」——「どんな仕事であれ、仕事をとおして自分自身が育つような働き方をさぐること」。これらを、現実の社会と手さぐりで接点を持つと努力していた当時、いく度となく胸の中で呪文をとなえるようにつぶやいた。それは、社会のレールから少しはずれた、山里のやぶ道を歩くかのような自分をめげさせぬための、まさに呪文だつたのだ、と思う。

*

広田先生とめぐり会うきっかけとなつた家庭科教師の道は年齢制限であきらめ、その後パートで、働く婦人の家指導員として働き、小学校に入学した子どもの成長に合わせた学童保育クラブを主宰し、脱サラして会社をおこした夫の片腕となり経理等を担当し、今は、大病でリタイアした夫と交代し、社会保険労務士として自営している。

九州の、鹿児島、海辺の小さな町で、仕事も家庭もどちらも大切で、手ばなさずやってきた。道なき道を手さぐりですすむような月日に、いく度となく「先生」と胸の中で叫んだ。

一人しずかに先生のご本を手にとつて、その本を手渡していただいた時の思いをあたためなおしたことも、いく度となくあ

った。思いあぐねた時、立ちどまった時、広田先生はこんな時どう言われるだろう？ と考え、怠けている時に先生を思つてハツとし、折ふし、まさに字のごとく、先を生きた人として、広田先生の存在を自分に照らし合わせてきたように思う。

先日、地元の高校に呼ばれ、「働くことを考える」というテーマで話をしてきた。高校生たちに職業意識をもたせるねらいで、昨年から社会人講師を学校へ呼ぶ企画らしい。労務士会から推薦を受け、社会に出ていく前の若い人たちに、親でも教師でもない大人として、自らの体験と仕事の現場で得たことを手わたしたいと思つたから、一も二もなく引き受けた。

レジュメを作りながら、自らのこれまでの半生をふり返り、「労働」をとおして自らを鍛え、家庭でも職場でも社会でも、互いが助け合うなかで育つということを伝えたい——とまとめながら、「アー これはまさに広田先生から教わったこと。いつの間にか自分ならではのあたり前の考えであるかのように思つていたけれど、これこそ広田先生から歳月をかけて教え、伝えていただいたこと！」と気づかされた。この一月末から二月中旬にかけて、近辺の高校三校に行くことになつてた。二校目の阿久根高校は、私が非常勤講師として職業生活のスタートを切つたところだった。二六

年ぶりに足を運んだその前日、〈あこら〉の斎藤さんから、広田先生の最期のご様子をくわしく聞くことができた。

講話の途中、出会いを生かす三つのポイント——「学ぶ」「仲間」「自分をひらく」のところで、広田先生のお顔が浮かび、ウツと涙が出そうになつた。「先生、高校生たち、よく話を聞いてくれましたよ。久びさの高校生たちに、いくら不安でもありましたし、何だかへたな生き方をさらすのは少々みつともなくもあり、でしたが……。帰りがけ、玄関のところですれちがつた髪の毛をピンと立てた男子生徒が、また来て下さいね！」と声をかけてくれたりで、手応えがありました」。

海が見える高台の高校の駐車場にしばらく立つて、ずっと前、二十年前くらい前、広田先生とご一緒に、この海を眺めた日のことを思いおこしました。

もうお目にかかれることはないけれど、先生から教わったことは、こうして後に続く私たちにしっかり生きつがれている。そして、そのことをまた私も、後へつなげる。——こうして久しぶりに文章を書いていて、そのことが確かなものとして胸に湧いてきました。

広田先生、先生と出会えて、しあわせでした。ありがとうございました。
(在鹿兒島)

キラキラした目

高橋美保

広田先生が、「これからの世界はどんどん変わって面白い時代になりますよ」と、目をキラキラさせながらおっしゃっていたのが、今も印象に残っています。

今から十四、十五年前はよくお宅に何って、話をして楽しく過ごしました。話題は豊富でしたが、いつも世界経済の行方や日本経済のトピックスに話が及びます。すると広田先生の顔が生き生きして、「これから面白い時代になる」という言葉が出てくるのです。少女のような好奇心を持ち続けた方で、私に勇気を与えてくれました。

先生に初めてお会いしたのが一九六九年の夏で、東大紛争の後、就職口を探さねばと、人に紹介されて先生にお会いに行った時です。翌年から日本女子大に非常勤講師をさせていたでいて、ときどきお会いしましたが、ゆっくりお話しできるようになったのは、お互い家が近くなり、時間的余裕が出て来た十五年ほど前からです。

所沢の「市民ネットワーク」に入らないかと誘われ、その会合の内外で、共通の話題として福祉について話をしました。またある講演の後、私の家に寄られ、当時我が家に

拾われた子猫をご覧になったとき、ふたりとも大の猫好きとわかり、意気投合しました。先生の温かい人柄は多くの人の認めるところですが、こと学問となると非常に厳しい先輩でした。

日本がバブル経済の頂点に達したころ、日本の経済の本質について議論したことがありました。日本が「豊かな社会」になったということはふたりとも一致していましたが、見方の違う点もありました。

先生は、豊かさの中の貧困に目をとめられ、戦後経済の転換点として、復興期におけるアメリカの対日政策に重要性を置いておられました。しかしふたりとも、欧米の先進諸国がこれほどの経済成長を続けてこられたのは資本主義が変質したことにあり、その変質した姿をとらえたいと思っています。「政官財」の鉄のトライアングルということではなく、資本主義が財界、指導階層や労働組合ではコントロールできないほど高度に組織された形態になっていることが問題の焦点でした。

先生とお話したころから十年たった現在、アメリカ経済主導によるグローバリズムが世界を覆い、構造転換が難しい日本は不況にあえいでいます。

ここでもう一度、先生にお会いして、この十年間を振り

返ってお話しできたらと、とても残念です。三年前に共通の友人のお葬式でお会いしたのが最後でしたが、あの張りのあるお声をもう一度聞けたら、と思います。

「母を語る」と広田先生

芦澤礼子

二月上旬、久しぶりに（あごろ）新宿事務局をお訪ねしたときに、斎藤千代さんから広田寿子先生が亡くなられたというお話を伺い、呆然としました。

広田先生には、一九九七年の「母を語る」という『あごろ』の連続企画でご講演をお願いしたところ、お忙しい合間を縫って快くお引き受けくださいました。

折しもその時期は、東大の藤岡信勝教授ら、のちに「新しい歴史教科書をつくる会」となるメンバーが、中学校歴史教科書に「慰安婦」の記述を載せることに猛反対して全国的運動を展開していた時期で、広田先生も義憤を感じておられたのだと思います。「母のことばかりでなく、この百年に女性がたどってきた歴史ということでお話ししたい」とおっしゃってくださいました。

「母を語る」の当日、初めて先生にお会いしました。女子

労働の分野ではバイオニアとも言える研究者と伺い、緊張していたのですが、とても温かい笑顔でスタッフをねぎらって下さって、一気に緊張がほぐれたことを覚えています。

ご講演は、七〇歳を過ぎておられるとは思えない明解な、それでいて親しみやすい語り口。二時間ほどの会の間、最初から最後まで椅子に腰掛けることなく、びしっと背筋を伸ばして語られる広田先生に感銘を受け、「格調のある楷書で書かれた文字のような方」という印象を持ちました。

その後、講演テープを起こして『あごろ』の記事にするときにも、丁寧に手を入れて下さり、掲載号ができたときには、たくさん注文して下さいました。できた直後だけではなく、その後も折にふれて掲載号を追加注文して下さい、そのたびに「お手数おかけします」「その後もいい号を出されていますね」「事務局の方は頑張っていますね」と、丁寧なご挨拶をいただきました。先生には随分励ましていただいたと思います。

『あごろ』を毎号丁寧に読んで下さった広田先生。私は（あごろ）スタッフとしてわずかな時間お世話になっただけですが、先生のことはずっとこれからも、心の中で大切に記憶していこうと思っています。本当に、本当に、ありがとうございます。

（前『あごろ』事務局）

辻元シヨツクを新しい力にしたい

竹村 泰子

辻元清美さんの辞職は本当に残念なことだ。女性の国会議員の比率が世界の一二〇位台という我が国。今回のような出来事で女性議員をひとり失うのは、男女共同参画を願って施策や立法に努力して来たひとりとしても、また、辻元さんを昔から知る仲間のひとりとしても、残念でない。

国会議員の歳費も、公設の秘書たちの給料も、すべて国民のみなさんが汗して働いた税金である。この大原則が馴れと共にあいまいになっていたのではないか。

私も通算十五年ばかり、衆・参の議員を務めさせて頂いた。仕事をするほど課題は増えていき、もっと大勢のスタッフが雇えればどんなに助かるか、といつも思っていた。ちなみに私も辻元さんと同じに全く組織をもたず、草の根の声を国会に届けようと立候補を決意した。したがって私

がカンパするところはたくさんあったが、どこからも財政的な支援を受けることはなかった。

国会議員の歳費は多額に見えるかもしれないが、東京と地元（私の場合は札幌）の事務所の家賃、光熱費、電話代等、さらに私設秘書の給料と、月々一〇〇万近くは必要となる。以前は航空運賃も自前であった。歳費だけで、私は長年やって来た。ぜいたくをしなければ、それで充分やっていける。もちろん、鈴木宗男氏のように全国に事務所を置くことなどできないし、加藤紘一氏のように一一〇万円ものマンションに入居することなど考えも及ばない。加藤氏の場合、政治資金管理団体に入れられた献金などで生活費や家賃のすべてをまかなっていたというのだから、さもしいと言いたくなる。

辻本さんが政策、公設秘書の給与をプールして活動費を捻出したくなった気持ちも、ある程度は理解できる。だが、それは絶対してはいけないことだった。辻本さんが最初の記者会見で答えたとおり、私の事務所では国会から各々の公設秘書たちの口座へ、直接、給料は振り込まれていた。それは彼ら、彼女らの給料なのだから当然のこと。不自由ながらそのようにして活動している議員が大勢いることをわかってほしい。そして信頼に応えて、使命感に燃え、有権者の代表として、今回の問題を、議員たちも、しっかりと受け止めてほしい。

辻元さんよ、あなたまでが―と残念に思う人がたくさんいる。しかしあなたの辞職が大きな波となつて、辞めなければならぬのに辞めない人たちの身にヒタヒタと押し寄せるだろうし、秘書給与のあり方も根本的に改革しなければならぬときが来るであらう。

このショックを力にする市民たちのたくましさを持つとうと呼びかけたい。

桜に寄せて

中村 道子

満開のあと、花寒むの日は訪れ、咲きしずまった美しい桜を眺めているこの二、三日です。

しかし、私たち世代にとつて、桜は日の丸と同じく、それそのものに罪はないのに、ちよつとうとましい戦争の花なのです。一せいに開き、一せいに散る。散りぎわがいさぎよい。日本人の精神を顕わす花として軍隊のさまざまな標章や軍歌に使われました。その下で多くの人びとが、多分不本意であつた死を遂げたと思います。

浮上する辻元さんの事件にも、「いさぎよい退職」、「引きぎわが肝心」の声が多く聞かれますが、「いさぎよく散る」——ちよつとカッコいい言葉だけが私の耳に残ります。

一回目の会見でウソを言つた辻元さん！これは貴女の弱さと古さだ。ちよつとした自己愛に足をとられたのでしょうか。カッコ悪くても汚れても、本意で行動して欲しいと思います。

この件、この先どのように展開するのかわかりませんが、「いさぎよく散る」と言う、安易で自己愛を含んだ行動ではなく、敢えて、日本人にとつてやや不名誉な諺、「転んでもただでは起きない」というような辻元さんらしい行動で、世の中を少しでも、よく変えて欲しいと思います。美しい桜に寄せて、この人材にそう伝えたいと思いました。（三月二五日記 洋装店経営）

（あこら）では、この問題を多くの人びとと考えたく「政治とお金―秘書問題を考える」緊急集会を開くことにしました。）

〈9・11〉と沖縄の若者

— アンケート結果から

大城 亘武

はじめに

沖縄は、一九七二年に「日本復帰」した。それから三〇年目を迎える直前の二〇〇一年五、六月に沖縄県内の大学生の「沖縄の社会状況についての意見」を把握するためにアンケート調査を実施した。その後九月十一日に発生したテロ事件を奇禍として、再度同一のアンケート調査を実施した。テロ事件による意見の変化を見るためである。テロ前の調査人数は女性二一八人、男性一四一人である。テロ後の調査人数は、女性一三二人、男性八二人である。総計五七三人であった。七二の設問が用意され、これらの設問は各二四問ずつ、戦争、自治、人権、の三領域にわたる。ここでは、戦争不安についての結果を中心に取り上げる。

各設問に対する回答は、「思う」「思わない」「どちら

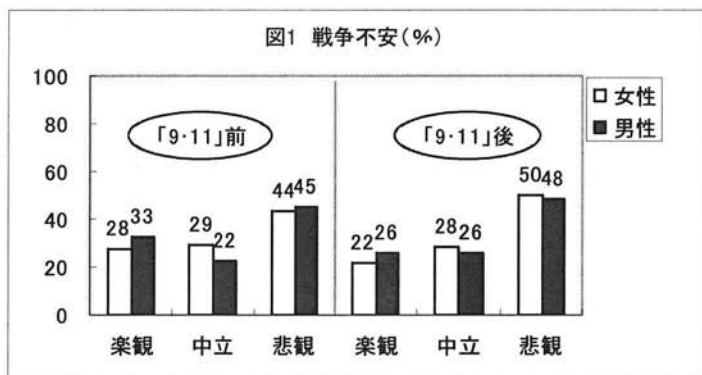
ともいえない」(以下、表記は中立としてある)の三件法によっている。また、回答の方向によって「樂觀」「中立」「悲觀」に読み直した。ここでは地元沖縄出身者のみについて集計してある。

テロ前後の意見の変容

1 戦争不安の概況

図1は戦争不安に関する二四設問の回答を「樂觀」「中立」「悲觀」に読み直し、平均の比率を一括して示したものである。左の三つはテロ前、右の三つはテロ後の数値である。テロ前後とも「悲觀」的に回答した比率がもつとも高く、男女差も統計的には認められない。ただし、女性では「悲觀」がテロ前後で四四%から五〇%へ増加し、「樂觀」は二八%から二二%へと減少している。男性の場合は「悲觀」が四五%から四八%へと増加し、「樂觀」が三三%から二六%へと減少している。米国で発生したテロ事件は、沖縄での戦争不安を高めているのである。周知のように沖縄県内には米軍基地があり、その面積は日本全体の米軍基地面積の七五%にあたるとは喧伝されているとおりである。基地負担

テロ前後で一貫して「悲観」傾向



率を試算してオッズで示すと四九七となる。つまり、四九七倍もの負担を負っていることになる。ということは、沖縄県民は本土住民の四九七倍もの戦争の危険の中にあるということである。当然、テロの有無に関わらず戦争に対しては楽観より悲観が上回っており、テロ事件は危険が現実になる恐怖をもたらすのである。

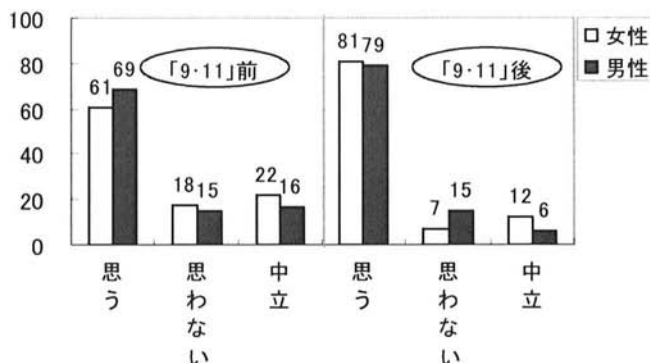
2 自国の名誉やメンツを守るための戦争

「米国人が自国の単なる名誉やメンツを守るために、戦争を始めるおそれがあると思いますか」という設問への回答を図2に掲げる。これは、米国人の行動様式への懸念を問う設問になっている。テロ前には女性より男性が辛らつな見方をしているがテロ後には逆転している。テロ後の調査は「報復テロ」が始まった頃なのでテレビ新聞等のマスコミ情報に反応したのかもしれないが、女性の敏感さが如実に表れている、と考えられる。

テロ事件によって、不安感や女性では二〇ポイント、男性では一〇ポイントも跳ね上がっている。米国人は正義と名誉のためには事の理非はともかく力で解決し

沖縄の若者は米国の振る舞いをどう見たか

図2 米国人は名誉とメンツのために戦争する(%)



ようにする性向を持つというステレオタイプが、現実
にアフガニスタンへの「報復テロ攻撃」によって実証
されたと言えるであろう。この不安は根拠のないこと
ではない。

ひょっとしたら、米国による「報復テロ攻撃」は、
沖縄の若者の米国観を決定づけるかもしれない。

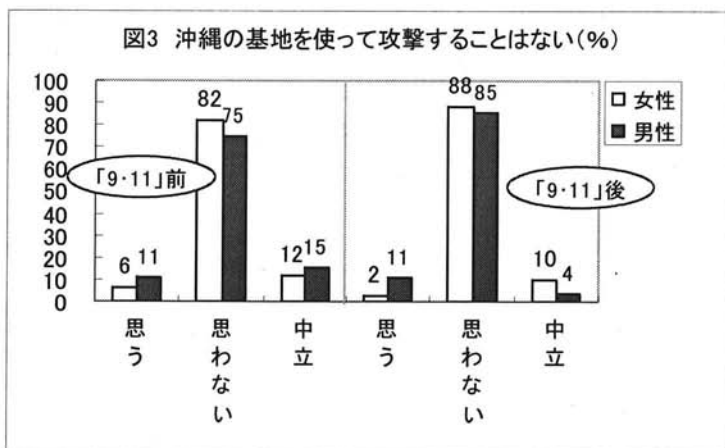
一連の米国側の対処法は、自国の国益を優先し、根
拠不明のまま、宣戦布告なしに、傲慢不遜にも他国を
空爆することであった。沖縄の若者たちは米国の振る
舞いを好意的には見ていないことは、この調査結果に
明らかであろう。

米国のアフガニスタンへの「報復テロ」は、国防総
省(ペンタゴン)が攻撃され、メンツを失ったことから
周章狼狽した結果である、と私は考える。なにしろ世
界に冠たる唯一の覇者・米軍の心臓部が破壊されたの
である。プライドはズタズタになった。世界に弱みを
さらしたのである。憤懣やるかたない。これを隠され
た動機としていのである。表向きは大方の同情と賛
同を得やすい貿易センタービルへの攻撃と惨状を強調
し、米国内および国際世論を主導し、テロ報復攻撃

沖縄から

米国の戦争に沖縄の米軍基地が利用された 「記憶」は過ぎ去っていない

図3 沖縄の基地を使って攻撃することはない(%)



を正当化したのである、と考える。米国はツイインタウィビル壊滅を徹底的に利用し尽くしたのである。それこそ傷ついた「名誉やメンツを守る」性癖が、米国をして軍事行動に走らせたのであろう。米国のアフガニスタン爆撃は戦争とは似て非なるものである。

3 沖縄基地の自由使用

「米国が沖縄の基地を自由に使って、外国を攻撃することはありえないと思いますか」の設問への回答は図3のようになっている。男女とも「思わない」がドミナントとなっている。その傾向はテロ後にますます顕著になり、男女いずれも80%を超えている。

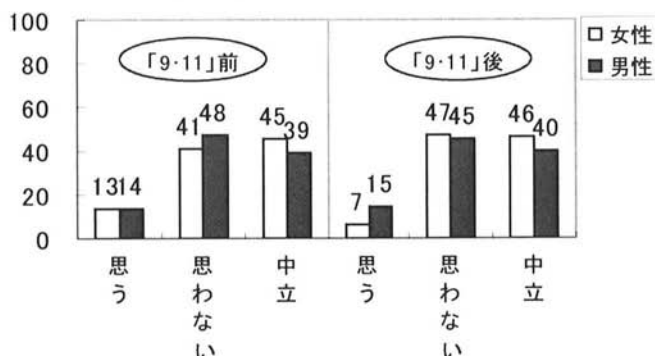
かつてベトナム戦争や湾岸戦争では、米軍は、沖縄基地から出撃していき、特にベトナム戦争の際には戦死者の遺体が米軍病院に搬入されたなどの記憶は古くない。米軍は沖縄の基地を自分の庭のように使用しているのである。では、沖縄に基地は必要ないと考えるか。

4 基地と経済

「沖縄の経済を豊かにするためには、今後も米軍基

「経済発展」と「基地」の間で悩む若者たち……

図4 経済を豊かにするために基地が必要(%)



地が存続し基地収入があった方がよいと思いますか」との設問に対する回答は図4に掲げた。テロの前後を問わず男女を問わず「思わない」の方が「思う」を上回っている。女性はテロ後に「思う」は減少し、「思わない」は増加しているが、男性はテロ後の方が微減している。つまり男女で逆の傾向になっている。ただ、テロ前後の変化は、統計学的には変動したというほどではない。この設問の回答で注目されるのは、どちらともいえない「中立」反応の高さである。四〇%前後の大学生が旗幟を鮮明にしていない。基地と経済の間で宙吊りの状態にある様を示している。

5 安保条約と日本の平和

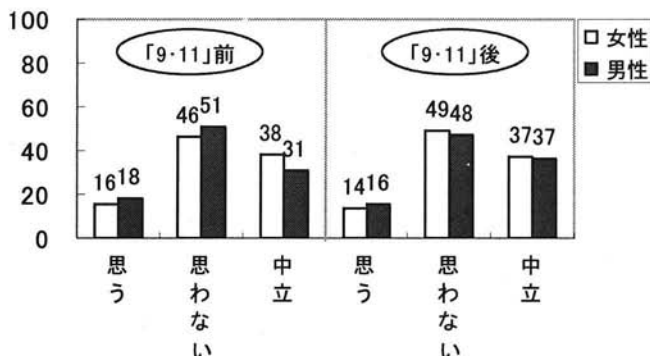
なぜ日本に米軍基地があるのか。言うまでもなく日米安保条約の取り決めで日本は米国に対する「基地提供義務」を負っているからである。安保の評価について見よう。

「日米安保条約が日本の平和と安全に役立っていると思いますか」に対する回答を図5に掲げた。この結果は、「思う」「思わない」の男女比較をすると、前の設問、

沖縄から

日米安保は「平和」に役立つか

図5 安保は日本の平和に役立っている(%)



すなわち基地と経済問題への回答パターンと似ている。しかし、安保が日本の平和と安全に役立っているとは「思わない」という評価である。この評価に対するテロの影響は認められない。すなわちテロ前後の数値の変動は統計学的には変化していると主張できるほどではない。テロの前後とも安保に対する態度は揺るがないということである。なお、中立反応は三〇%を超え、判断に迷いが出ている。

おわりに

「9・11テロ事件」は、「世界が変わった日」と称されるくらいの大事件であった。すでに述べたように、ここ沖縄でも大きな変化を引き起こしている。それは沖縄に広大な米軍基地があることによるだろう。しかもアジアの国へ「テロ報復」攻撃が予想されていたのである。反応は男性より女性においてより鋭敏であった。その鋭敏さは戦争への抑止効果をもつものと期待したい。テロ事件とその後の世界や日本の動きを注視しながら平和への思いを新たにしたい。

(おおしろよしだけ／沖縄キリスト教短期大学教授)

試写室

映画『こどもの時間』 野中真理子監督に聞く

子どもの心に耳を澄ませる

——「大変なこの日本で生きている『こどもの時間』を多くの人にぶつけるように贈りたい」と、埼玉県・桶川市の「いなほ保育園」の子どもたちを撮った映画が、いま、全国的に反響を得て、自主上映されていますね。

正直言って驚いてしまいました。昨年の夏、映画館の上映が決まったとき、「ああ、よかった」と胸をなでおろしましたが、一カ月の上映予定が、十六週

まで延長、その後アンコール上映もしていただき、こんなに反響をいただくとは……。スタッフも皆、この展開を予想もしていませんでした。

ただ言えるとしたら、映画自体はたいへん素朴なものですから、作品の力というよりも、あそこに写っている事実の強さが、多くの方の心に響いた理由だと思います。テレビや新聞では「教育を問う」とか、「子どもを取り巻く環境」といった情報を毎日見ているのですが、日本中で、子どもの現在の状況に疑問や不満を持っている方が、いかに多いか、お顔の見える皆さんの声を聞いて、知らなかった多くのことを知り、日々目のさめる思いです。

たとえば北海道の富良野から、「自然はたくさんあるのに、それを子どもが育ちに生かした保育園がないことが残念です」といった言葉をいただくと、考えさせられました。



畑も林もある4000坪の土地を、0歳から6歳までのおよそ100人の子どもが、駆けまわる。© マザーランド

各地での自主上映会は、主催者が経済的に潤うかという点と、むしろ持ち出しのほうが多く、お仕事をもちながら、小さいお子さんを抱えてチラシを配ってくださる方がたくさんいらっしゃいます。

——野中さんは、三十五歳で第一子を出産なさり、『こどもの時間』の撮影がほぼ終わられた五年後に、第二子を産んでいらっしゃいます。

ええ。でも、子どもを産むまえは、子どもが苦手だったんです。それが、映画完成までの六年の間に、子どもにとっても親近感を抱くようになりました。

五年間の撮影においても、出産をはさんで一年以上に及んだ編集においても、全身と魂を傾けて「その子の思い」を知ること集中しました。私は、保育や幼児教育の専門家ではありません



監督の野中真理子さん

せんから、その知り得たことの正否は定かではありません。しかし、そうして心をこめて、子どもを見つめ続けたことで、出会った子どもたちのすべてに、強烈な愛情があるんです。彼らと将来どこで擦れ違っても、放っておけないという感じになるわけです。親戚のおばさんの心境です。百人以上の子どもを、そのように見てきた時を経て、子どもに感情移入が出来るようになりました。第二子を産んだのも、「子どもって素晴らしいな」、「愉快だな」という「プラス」の感情が自分の中で増えたためじゃないかと思っています。「子育てって大変」、「子どもつてうるさくて嫌」というように「マイナス」に考えていたら、第二子を授かるご縁も遠ざかったかもしれません。

桶川市の「いなほ保育園」には、一人っ子はほとんどいません。一番多いのは三人兄弟（姉妹）です。子どもへの「プラス」の思い、子育ての時の充実感、幸福感が、自然と反少子化になるんですね。

——『こどもの時間』は、卒園式の長いショットから始まりますね。子どもたちが園長先生に儀礼的にお辞儀をするのではなく、ひとりひとり、誇らしく胸をはって賞状を取りに行く様子が、とても印象的でした。

私はこれまでテレビのドキュメンタリーをやってきたのですが、テレビには、視聴者にチャンネルを変えないで見ていただくためのリズムが必要なんです。個人的には、ここをもっと長く見ていたら面白いんだけど、と思う場合でも、説明のナレーションを入れたりします。映画『こどもの時間』の前に、「ドキュメンタリー人間劇場」（テレビ東京）で一部を放映しましたが、あれはあれで、大反響をいただいたのですが、私としては、映像を見る人が、保育園に来ているように子どもたちに出会えれば、子どもの思いがもっと伝わるんだけどなあ、と。でも、そんなことをやるようなテレビ番組はなかなかありません。

だから映画では、冒頭から、何の説明もせず、同じことが繰り返されるショットから始めました。同じように賞状を取りに前へ進み出る子ども、ひとりひとりの胸のうちも違うし、ひとりひとり皆違うんだ、ということを見て欲しい映画なんだ、と。冒頭から『こどもの時間』の見方を提示したつもりです。

——一〇〇時間という大変な映像素材を、一年間かけて、八〇分までに編集された。

どの子にもあまりにも愛情を感じてしまつて、切れないんです。最初にまとめたのは、一〇時間で、まず十分の一にするのが精一杯でした。

「いなほ保育園」の園長先生である和子先生やキンタさんたちの、こどもたちとの関わり方は素晴らしく、感動的なんです。この保育園は、歌を歌ったり踊ったり、さまざまに文化と深く結びついた営みを日々行なっています。が、それも今回は切らざるを得なかつ

た。結果的に、子どもたちが何か自分でやっていることに限って編集しました。映画のタイトルを『こどもの時間』に決めた時点で、編集方針が決まり、そこに集約していったということです。そして最後に、普遍的なものが残ったように思います。



人生のはじまりの時間 © マザーランド

たとえば、子どもがカブト虫を採っているシーンは、長く見ているとわかっ

てくる。虫を採りたい思いが強くあるから、脚を蚊に喰われても採る。それもいっぱい採るんじやなくて、両手に一匹ずつ持つて、もう一匹いるかなと思ふんだけど、やっぱり今日は二匹でいいや、と去っていく。そんな子どもの心の声が聞こえるようなシーンを厳選していきました。

子どもたちには、かけがえのない多くのことを教えてもらいました。たとえば五歳の男の子二人のケンカのシーン。言葉で自分の言い分を明確に伝えられない分、叩いたり、蹴ったりして、もめている。泣きじやくりながらも、二人がその場を離れないのは、为什么呢。何を思っているんだろう、と思つて、撮影の夏海さんも私もみつめていました。そして、他の子が入ってきて、緊張感がくずれた瞬間を見事にとらえて二人は仲直りするんですね。大人にはとても真似できません、あの鮮やかな仲直り。わだかまりを一瞬



◎ マザーランド

『こどもの時間』

監督 野中真理子

撮影 夏海光造

音響 米山 靖

制作 寺中桂子

制作デスク 橋本こずえ

語り イッセー尾形

協力 いなほ保育園のみなさん

製作協力 テレビ東京

宣伝美術 川上修

製作 マザーランド

「こどもの時間」映画上映委員会

2001年/16mm/カラー/80分

【自主上映の開催等連絡先】

マザーランド「こどもの時間」

映画上映委員会

www.motherland.co.jp

TEL 03(3497)0140

にして笑顔に昇華させるエネルギー。
素敵だと思います。

——保育園の園庭で毎日焚かれる火と子どもたちの関係は、とても密接でしたね。

「いなほ保育園」との最初の出会いは冬だったんです。住んでいた杉並区より外の気温が三〜四度低いところへきて、園舎の中は、焚き火のある外より寒いほど。それなのに、Tシャツの上には半纏を着たぐらいの格好で、子どもたちは走り回っている。それを撮影している私は、アラスカでロケができるようなダウンを着て、ホッカイロを何個もつけている。小さな生命体が、火に

寄り添いながら、苛酷な冬を乗り越えていく姿が、感動的だったんです。

食べているものも、ただ食べているというだけでなく、本当に生きるために食べているというのが実感としてありました。もちろん、食べることは彼らにとつて美味しさや喜びとしてもありますが、暖かい味噌汁や田楽を、寒い中で渡されるから美味しいし、それは喜びとともに力にもなるんですよ。だから、火からは、あたたかさや、炎のドラマや音、匂いばかりでなく、生きる力が、子どもに還っていくんだな、と気づかされました。その上、お焦げも作れる、泥団子や魚の骨も焼いて楽

しめる。

——撮る対象にのめりこんでいく……。

そうですね。でも、それは親近感を描くという場合ばかりではないんです。私は人間を撮る場合がほとんどですが、撮る対象となる人との関わりを深めてゆくなかで、ただ主観的に感情移入するというのではなく、客観視しながら、その人にラブレターをしたためるというか、どこかで愛情を持てなければ、撮ることはできませんね。どうでもいいとしたら、もっとその人のことを知ろうとは思わないじゃないですか。たとえ反感や疑問をもつことがあつても、その人への愛情があることが出発点で、どうしてこうなのかな、なにを思っているのかな、と思う。撮影期間は長いですが、そうでないと続けていきませんね。

二〇〇二年三月二六日 マザーランドにて

(聞き手 小川宏美)

語りかけたいあなたへ 44

大里知子

雪の音

雪の風物詩「かまくら」で全国的に知られる、秋田県南部、横手市。

この横手市は義姉の出身地でもある。

私が「かまくら」がどうしても見たくて、横手市を訪れたのは今から二十七年前（一九七五年）の二月十五日のことだった。

「かまくら」は、夜のほうが幻想的ということで、午後、車でわが家を出発して、三時間かけて秋田市へ出て、秋田市から同行の姉（則子）たちと合流して、また一時間半で横手市へついた。

秋田市から同行した方が、横手で箱ゾリを借りてくださって、私は雪がのんのん降る中を、箱ゾリで見物することになった。

目指す「かまくら」は、夜の闇にボツカリと浮かんで見えて、さながらメルヘンの世界を見るようで、たいへん印象的だった。

「あの時はみんな若かったね」と、姉と懐かしく話す時がある。

兄が、横手の人と結婚することになるとは、想像さえしなかった頃だった。

その横手の義姉の実家から「雪の音」という、吟醸酒を贈られた。

「雪の音」というのは、なんてきれいな名前なのだろう。

きれいなものが好きな母が、一番大喜びだったことは言うまでもなく、早速みんなでご馳走になったしだいである。

雪が降らない地方の方々には、「雪の音」と聞いたら、しんしんと降る雪の音なき音を想像される方が多いのではないだろうか。

ところが実際に雪国に暮らしていると「雪の音」（雪にとまあ音と言うほうが正確かもしれない）は、確かにあるのだ。冬の明けがたは四時といっても、まだ真夜中にひとしい。

その四時に、わが家の横の花輪駅につながる道路へグワーングワーンという音と共に除雪車が来る。

四時に除雪車の音で目覚めると「あーまた今日も雪だ」と、気づかされる。

雪の日は、私の全身の痺れ感と締めつけ感も、ふだんより一段とひどい。

それから、各家々での、除雪の音もある。こんなふうに、私の雪の日の一日は、はじまる。

九十二歳の母も、雪の日、しばれる日は身体にこたえるようで、なんとなく元気がないのを感じる。

『お母さん、あとひと月すれば大分暖かくなるから、もうひと月の辛抱よ』と、私は言っている。この言葉は、もしかしたら母に言っているというより、自分自身に言い聞かせていることなのかもしれない。

桑江テル子さん、沖縄市市長選に

このところ、選挙のたびに市民側が敗れている沖縄。一四月二二日の沖縄市長選には、現市長の対抗馬を」と、模索を続けていたが、（あごろメイト）の桑江テル子さんが三月十三日ようやく受諾、市民は、沸き立っている。

出馬表明が遅れ、超短期決戦となったが、東門美津子衆院議員はじめ女性たちも結集、必勝を期している。沖縄市に知人友人のいる方は、電話・ハガキで、ぜひ支援の依頼を。

有事法制案、民間人に罰則規定もりこむ

日本が攻撃をうけた有事に、自衛隊の作戦行動の円滑化を検討している小泉政権は、今国会に米軍との協力の強化を盛り込んだ有事法制の改『正』案とともに、現行自衛隊法に民間への罰則規定を加える法案を提出する。

現行の自衛隊法は、防衛庁長官らの要請で、知事が必要な

関係者に従事命令を出すことができるが、今回の法案（一〇〇項目以上）では、その対象である民間の医師ら医療従事者・土木技術者・空港港湾運送従事者、食料や燃料の物資保管従事者らが命令に従わない場合、災害救助法に準じて、六か月以下の懲役または三〇万以下の罰金を科すことにしている。昨今語られている「戦前への回帰」が、このように実態を伴って進んでいることに対して、市民はもとより、与野党議員の中からも拙速を慎める声があがっており、今後の運動は極めて重大。

子育て支援への改革を提言 — 国民生活白書

三月二六日発表された国民生活白書は「家族の暮らしと構造改革」。終身雇用慣行の崩壊や不況で、夫婦の働き方や子育ての変化を認め、就業時間の短縮、子育て支援等を進め、家族を社会全体で支えるための「構造改革」が必要と提言している。

白書が家族をテーマとするのは十八年ぶりだが、専業主婦は八〇年の三七・一％から、二〇〇〇年には二六・五％に減少。

ただし、フルタイム就労は難しいのが現状。

一方、子どもは、当然持つもの、という意識は薄れ、二〇代後半の女性の有子率は六一・〇%。この二〇年間に三割も減り、育児への不応も増えた。「保育所と若いボランティアを拡充して家族の子育てを支える仕組みを」と白書は説くが、資本主義体制の中での人心の荒廃、グローバルゼーションなど、より大きな根本的問題にはふれていないのが残念。

メディア規制「三法」国会審議へ

政府は三月八日、「人権擁護法案」を国会に提出した。

「社会の不当な差別、虐待などによる人権侵害に対する救済を図ることが目的と言うが、マスコミ各社は、継続審議中の「個人情報保護法案」と、自民党が近く国会へ提出予定の「青少年有害社会環境対策基本法案」の三法案は、メディアを規制対象としており、憲法が保障する表現の自由や国民の知る権利を脅かす危険性があると、強く反発している。

議会で男女平等条例案批判に抗議殺到

三月三日、新潟県は、「男女平等社会形成推進条例案」を可

決したが、斎藤隆景自民県議は、「女性の労働参加は家族制度を完全崩壊に導く」と批判。主婦の存在を強調して「女は女らしくあるべき」と述べ、女性の職種を「教師、保育、看護」等に限定しかねない発言を行ない、各党派議・男女含めた幅広い市民から抗議が殺到している。

（あこら上越）の鈴木勢子さん（青海町会議員）も、この「女性蔑視発言」に投書し（新潟日報・三月五日）、「斎藤県議は（新潟県女性議員の会）等での発言が好評で、女性議員も、これまで医師でもある斎藤県議を講師に推薦してきたが、「彼ほどの人でもこのレベルとすれば、今ほど『男女平等社会形成推進条例』が求められている時はないのではないか」と問題提起、さらに、根深い「女性蔑視」の根底を見据えて、「立ち止まらずにしっかりと歩んでいこう」と提案した。

親族でも「里親」に国費補助を

親の死別や、親による虐待を受けている子どもを親に代わって養育する「里親」には、月約六万円の生活費が支給されるが、従来、親族は里親になることが認められなかった。

厚生省は、現在九割以上が施設に依存している児童養護を「家庭」に近づけようと、親族も里親になることを認めるよう方

針を転換、近く実施要綱を決めて都道府県に通達し、十月から実施する。

同時に、児童施設の職員や小児科医らが、二年以内の範囲で養育を担当する「専門里親」も新設。「専門里親」には、生活費のほかに、月額約九万円を支給する。

「君が代」伴奏職務命令」に教育委が「ノー」

東京・国立市の小学校卒業式の「君が代」伴奏をめぐる「職務命令」として伴奏を要請した校長と、音楽専科の教員が対立している問題で、日の丸・君が代の強制に反対する市民団体が、同市教育委員会に、四月の入学式までにピアノ伴奏の強制をしないよう各校へ通達するように要望書を提出。

同教育委員会は、それに対して、「職務命令を出して学校運営をするのは好ましくない」と述べ、音楽専科教員が「君が代」伴奏をしない権利を守る発言を行なった。

沖縄・北谷暴行事件、米兵に懲役判決

地位協定撤廃要求の声広がる

昨年六月、沖縄県北谷町で発生した米兵による暴行事件で、

婦女暴行罪に問われた米軍嘉手納基地所属の二等軍曹、ティモシー・ウッドランド被告（二五）に対し、三月二八日、那覇地裁は、被告の無罪主張を退け、懲役二年八月を言い渡した。

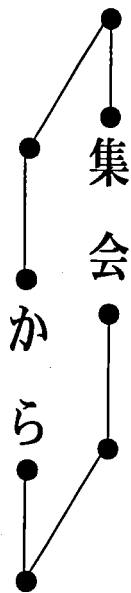
事件を契機に沖縄県内では、日米地位協定の抜本の見直しを求める声が高まっているが、川口順子外相は「運用の改善に努める」を繰り返すばかり。森山真弓法相も「割合に短時間で引き渡してもらえた」（『沖縄タイムス』三月二八日付）と発言。「沖縄県民の感情を逆なでする」と憤りの声があがっている。

「命どう宝」 阿波根昌鴻さん逝く

戦後沖縄で、米軍による強制土地接収に対する反対運動のリーダー的役割を果たした阿波根昌鴻（あわねんこう）さんが、三月二一日、死去した。戸籍上の年齢は一〇二歳。

阿波根さんは、一九五五年七月から五六年二月、沖縄本島を「乞食行進」し、「乞食をするのは恥ずかしい。しかし、われわれの土地を取り上げ、われわれを乞食にさせる米軍はもっと恥ずかしい」と、米軍の強制土地接収の不当性を訴えた。

八四年には、自宅敷地内に反戦平和資料館「ヌチドウタカラの家」を開設。県内外から毎年、一万人を超える人たちが訪れるようになり、「命どう宝」という言葉は全国に広まった。



九州環境ボランティア会議

全国初の試みとして、市民と国が連携を目指した「九州環境ボランティア会議」が二月二日～三日、熊本県芦北青年の家で開催された。

官民連携という新しい試みに五〇〇のボランティア団体が参加予定という新聞記事に、期待を持って参加した。

当日はあいにくの雨だったが、会場は水俣湾を見おろす丘の上のすばらしい自然環境の中に建つ、真新しい施設であった。

富士持吉人さん（宮崎県・佐土原四十会）を実行委員長に、「地方から環境再生」をテーマとして、九州のNGOと環境省が参加。官民ネットワークの構築を模索した。本会議の柱は、①九州の環境ボランティアのネットワークを創ろう、②時代をつなぐ環境コミュニケーションを創ろう、③自然を愛するところを育む環を創ろう、④美しい

地球を未来に贈る実績の環を創ろう、の四つで、「環の国」を目指すという環境省の方向性と一致したものである。吉井正澄水俣市長は、日本初の公害問題として長くて苦しい忍耐の歴史を刻む「水俣病」について、水俣病患者の犠牲を無にしないようにと、水俣の再生を模索した実績を語り、強烈な印象を残した。

「『もやい直し』を行なっている中でも、水俣病展の開催をめぐつて再論争をかもし、傷の深さを浮き彫りにしたこと。悲惨な水俣病の犠牲者への償いは、世界に誇れる環境エコ倫理型社会の実現しかないという立場で、環境都市として徹底した資源のリサイクル利用活動を行い、水俣環境、研究センターでのゴミ資源の再利用の研究を行い、JICA研修生の受け入れ、またISO取得を企業や学校でも目指し、市民が誇れる環境都市として水俣は蘇った。」

環境省総合政策局環境経済課・民間活動支援室室長、西宮洋氏は、川口環境相（当時）からの「環境問題の解決にはNGOの活動が必要不可欠」とのメッセージを伝え、「これからの環境パートナーシップの構築に向けて」という基調講演を行なった。公益性を官から民へ移行したいという方向性を提示。またしきりと、これからお役人は変わりますという発言もあったが、その具体的な内容はなく、官の

変革への説得力はなかった。

討論では、多くのボランティア団体は、独自に環境調査を行いたいのだが、水質や土壌などの分析を行う経済的余裕がない、と窮状を訴えた。「セブンイレブンみどりの基金」公募にも、三倍ほどの応募があるようだ。

「学」を代表して、大学の各専門分野の人材を利用する必要性を説く発言があり、学と民との関わりには、我が意を得た発言だった。

しかし残念なのは、諫早湾干拓、熊本県川辺ダムなどの大型公共事業に異議を唱えている団体の参加がなかったことだ。開催前に連絡が入ったということなので、何らかの齟齬があったのだろうか。確かなことはわからない。

会議宣言では、①NGO同士が支援しあうことで活動を強化する ②各地の環境問題を明らかにする ③国（環境省）と連携し官民ネットワークをつくることを採択し、会議を定期的に開催することも決まった。

国が本気で官民ネットワークを構築し、公益性については民に譲るという点を、しっかりと財政面での裏付けとともにきっちりと実行してほしい。そしてお金は出すけど立場は対等であり続けてほしいというのが、会議参加後の感想である。

（あこら九州）加藤祐子

ワークシェアリングと均等待遇

オランダモデル調査報告会

「均等待遇アクション2003」の有志十八名は、昨年十月二十八日から十一月三日まで、ジュネーブのILO本部とオランダを調査に訪れた。福岡からも二名が参加し、その報告会が三月三日、福岡市中央区の婦人会館で、「ワーキング・ウイメンズ・ヴォイス」主催で行われた。東京からの酒井和子さん（女性のワーキングライフを考えるパート研究会首都圏代表）が基調報告をし、福岡の富吉直美さんと高木美砂子さんも報告を行なった。

酒井さんは、最初に日本の女性の現状について、雇用形態別の分析を述べ、就業形態の多様化は女性の非正社員化を意味し、雇用の不安定化、低賃金化をもたらすこと、また女性の労働は、家計補助・補助労働・自発的パートから生計維持・基幹労働・非自発的パートへと変化していることを話し、オランダモデルを紹介した。

オランダモデルとは、①パートタイム雇用の推進によるワークシェアリングで、ただしフルタイムと賃金の面でも社会保障の面でも均等待遇で、働く時間によって決まる。

②政労使による社会的合意がなされている（賃金の抑制、

労働時間の短縮、減税)。③コンビネーションシナリオ(夫○・七十五妻○・七五一一・五、どちらもパートで働く)であること、と説明。

コンビネーションシナリオとは、夫婦共にペイド・ワークもアンペイド・ワークも担う選択を意味し、最低賃金との差額が補償されている。オランダは、日本と同様に性別役割分業意識が根強い社会だったが次第に変化している。

ワークシェアリングはフランスのように労働時間を短縮して労働者と失業者との間のシェアを目指すもの、ドイツのように早期退職による高齢者と若年層との世代間シェアを目指すもの、そしてオランダのようにパートタイム雇用の推進を目指すものなど種々ある。オランダはパートタイムとフルタイムの相互転換が可能で、男女ともに仕事とケア(育児・介護・疾病・学習・技能習得など)の調和を図るうとしている。

日本のワークシェアリング議論は、均等待遇や社会保障の充実が欠けたまま、雇用創出ではなく企業内での雇用維持に重点がおかれている。年金や賃金制度の諸手当など、世帯主義から個人単位への転換が必要であるなど、さまざまな問題提起がなされた。詳しい報告書も作成されているので、購読をお勧めする。

(あゝ九州) 石原豊子)

三・八国際女性デー・おんなたちの祭り

武器よりこはん 武器よりしごと 武器より歌を！

国際女性デーにちなんだ毎年行われてきた「おんなたちの祭り」。その第十回目が、「武器よりこはん 武器よりしごと 武器より歌を！」と題され、三月十日、東京ウィメンズプラザで開催された。

午前は、パート労働やアートの、子育てなどに関する分科会。午後の全体会では、松井やよりさんのお話、そして歌とダンス、講談、体ほぐし、リレーメッセージ。頭だけでなく、からだ全体で、明るく、楽しく、そして真摯に、おんなたちの現状を考え、可能性を模索する一日だった。

会場には、おんなたちの想いを、毎年一枚ずつ形にしたキルトが十枚。これまでの力強い歩みを振りかえることができ、感慨深い。しかし、DV被害者の援助を求める切実な声や、児童扶養手当の切り下げ撤回を訴えるシングルマザーの声、有事法制、元日本軍「従軍慰安婦」問題などについて、ともに考え、声を上げていこう、とのメッセージを聞くにつけ、女性の前にある険しい道はまだまだ続く、と姿勢を正さずにはおれない。この日の参加者は約三〇〇人。ここから共に始めようではありませんか。

(Y)

市民の募金による

「戦災資料センター」がオープン

東京の下町一帯が焼け野原となった一九四五年三月十日。この東京大空襲で、城東区（現・江東区）北砂町は隣接する深川とともに、米軍B29爆撃機の激しい焼夷弾攻撃にさらされた。五七年後の今、下町の角かどに安置されたお地藏さんに花を供える人たちも年々高齢化し、空襲の傷跡もほとんど見られなくなった。

その空襲の中心地だった江東区北砂一丁目に三月十日、「東京大空襲・戦災資料センター」（略称・戦災資料センター）が建ち、オープンした。

「東京空襲を記録する会」の早乙女勝元さんらが中心となつて、二年前より建築費一億円の募金活動を開始し、三九〇〇人を超す人たちの協力によつて完成した。

一方、これに先立つ九九年、東京都は「平和祈念館」の計画を凍結したまま、多くの市民の反対にもかかわらず、墨田区横網公園に「追悼碑」だけを建設した。こうして、行政が何らの対応をしない中で、戦争を風化させないためにも、市民みずからの手でこの資料セ

ンターを作ろうという呼びかけであった。

三階建て総床面積八〇坪の小さな建物だが、入り口に幼子を抱く母のブロンズ像「戦火の下で」を設置。

一階が受付と資料・研究室。二階がミニ画廊付きの会議室。三階が十五坪ほどの資料展示室。この展示室にはB29爆撃機から投下されたM69油脂焼夷弾筒をはじめ、焼け焦げた防空頭巾、罹災証明書、深川高橋五丁目戦災死没者過去帳など、多くの「歴史の遺品」が所狭しと並べられている。十日の開館以来、平日で六〇人、日祭日には二〇人を超す入場者が訪れている。お年



戦災資料センターの入口に設置された
母子像「戦火の下で」（河野 新 作）

寄りが大半だが、母子や若い人たちの姿も少なくない。

二階会議室に置かれた感想を記す大学ノート五冊には、びっしりと来館者たちの悲惨な空襲の体験や平和への思いが書き込まれている。

「現在を生きる人の責任は重い」（川崎市・男性）。「世界のどこかでいつも戦争がある。世界のどこかでいつもいつも平和を祈る声が大きくなることを……」（八王子市・女性）。「五七年前の当時十六歳の小生は台東区の坂本地区にて戦災に遇いました。丁度江東地区とは異なつて風の影響もなく直撃弾等もほとんどなくてラッキーでした。翌日亀戸にいた親子三名にて上野の山まで避難しました。勤労動員先の日暮里の工場の被害の大きさにはびっくりしました。もう動員どころか、三月末にやる予定だった卒業式も、それどころでありませんでした。その後、近所の親戚の家に十日位いて、やっと母の実家の小田原市に疎開したものです。とにかく家の前の一角は全部焼けだされたのですが、残った家は奇跡という他ありません。小生も無事育成に感謝して、毎日を過ごしております」（台東区・男性）。「歴史の重みを感じました。二度と戦争は起こしてはならない。小生は当時中学二年生の勤労動員でした。本所深川方面の大空襲を記憶しております」（川崎市・男

性）。「東京大空襲の米軍参謀カーチス・ルメー氏に、日本政府が戦後航空自衛隊の育成に貢献したとして、勲一等を贈ったというのは驚きです。許しがたいことです」（千葉市・男性）。——今も心に傷を抱えている人、平和を願う人の声が行間ににじみ出ている。

同センターの事務局員の女性は「団体からの問い合わせも。第五福竜丸とセットで見学したいというお話です。また、当時深川で戦災にあい、現在は長野県に住む女性から、このような資料館ができて何かようやく胸のつかえがとれたというお電話もありました。そうした全国の皆さんの熱い思いが結晶となつてできたセンターですので、皆で精一杯心をこめた運営をしていこうと思つています」と話す。

ここには「記録する会」が、七〇年の発足以来集めた膨大な物品や資料があるが、順次公開していくという。五月は、山の手空襲を中心にした展示を行う予定。館長の早乙女勝元さんは、「このセンターが小さいという方もいれば、思ったより広いといつてくれる方もいて様々です。しかし、ここはあくまでも市民レベルの戦災の語りつぎと学習の場、研究が目的です。引き続き東京都には都民参加による平和資料館の建設を求めていきたい」と、都の度重なる後ろ向きの姿勢に

抗議し、平和資料館の建設を迫っていく決意を語っている。

地下鉄都営新宿線の住吉か西大島駅から歩いて約二十分の住宅地の一角にある不便な場所だが、来館者たちからは、「あの当時、焼夷弾をくぐり抜けてこの街を



2階会議室の三二画廊で、大学ノートに悲惨な空襲の感想を記す来館者たち

さまよい歩いた私たちにとつてはたいした距離ではない」という話も聞いた。このような人たちがいて、次代の子どもたちにそれぞれの「あの日」の体験を伝えてくれる限り、戦争は風化しない。

同センターでは、今後の資料の収集・整理・公開、「センター

ニュース」の発行など、恒常的な維持・発展のために維持会費または維持募金（個人一口二千元、団体一口一万元以上）をつのっている。（取材・竹嶋弘）

（戦災資料センター）

●所在地 東京都江東区北砂一―五―四

（財）政治経済研究所内

●開館時間 十二時〜午後四時まで（月・火曜日休館）

●入館協力費 一般三〇〇円

中・高校生二〇〇円（小学生以下は無料）

●電話 〇三（五八五七）五六三一

■主な展示資料目録

I 開戦・初空襲・防空生活／開戦の詔書（写し）、「新高山上レ」（写し）、警防団ベルト、防空頭巾・もんぺ、防毒マスク、防空電灯笠、学童疎開荷札、警戒警報発令板など II 東京空襲関係／M69油脂焼夷弾破片、東部軍管区米機来襲記録、火を浴びた貨幣・紙幣、郷土人形・盃・茶碗、罹災証明書など III 全国空襲関係／米軍伝単（マリアナ時報、落下傘ニュース、ポツダム宣言）、写真米軍撮影（北九州・八幡、名古屋、神戸）など IV 敗戦・戦後／終戦の詔書（写し）、終戦を報じる毎日新聞、報知新聞など

桑江さんに初めてお会いしたのは、たしか八七年。(うない結)のゲストに招かれた折、源啓美さんのご依頼でラジオに出演、てい談の一人が桑江さんだった、と記憶する。なんと聡明な方、と感心した。

〈あごらめいと〉
沖縄市長選挙に立つ
桑江 テル子さん



琉大の国文科を出られて中学の先生を三年、新聞記者を十一年、それから沖縄市役所で二三年、女性政策推進課長、福祉部長を歴任され、自治労沖縄県本部の女性部長も。自治労では、その活動を全国的に評価さ

れた方と知り、なるほどと納得したのは、最近のことだ。

九五年には少女暴行事件に(基地・軍隊を許さない行動する女たちの会)を高里鈴代さんたちと立ち上げ、東京のデモでも、何度もお会いした。沖縄の方は、どなたもスピーチが上手だが、簡潔な話の中に、心に迫る言葉を、いつもきちっと入れておられ、すっかり桑江ファンになった。その桑江さんが、四月二二日投票の沖縄市長選に、急に立候補されるという。固辞し続けておられたが、東門美津子衆院議員はじめ、女たちの強い要望で決意されたとのこと。

「立った以上は勝ちます。出遅れですが、今は一対一、ほぼ互角と認識しています」とのこと。このところ沖縄の選挙では、市民側の旗色が悪いが、桑江さんで、沖縄の風だけでなく、日本全体の風も変えたい。

教師・記者・公務員・労組役員

と、幅広いジャンルで活躍された個人史は、市政の上にも、きつと大きな光になるだろう。

お好きな言葉は「チャンスを生かせ」「足元を掘れ」とのことだが、二つともまさに市長選にぴったり。

「春から縁起がいいわいなア」になりそうだと、胸がドキドキしている。

沖縄市は、那覇市の南にある旧コザ市。基地とは沖縄の中でも格別に深いかわりがある。ここに女性市長が生まれる意義は大きい。

著書に『沖縄からの告発—うないとして、人間として—(九九年ゆい出版)、共著に『沖縄女性史』『沖縄を知る事典』など。

お話同様、文章も、正確で爽やかなのに感心するが、国語の先生、そして新聞記者をなさった方。市長ご就任のスピーチも、さぞすばらしいことだろうと、今から期待している。

(斎藤千代)



BSE（「狂牛病」）拡大 知られざる真相

3月3日(日) 午前10時
テレビ朝日サンデープロジェクト

我が国のBSE（牛海綿状脳症）対策の遅れについてはNHKがNHK特集で素早く追及したが、独自の調査を続けていたテレビ朝日サンデープロジェクトの報道は、追及の範囲を特定してただけに、より核心に迫るものだった。

英国でBSEが発見されたのは、一九八六年。八九年にはヨーロッパ諸国にも広がり、九四年、英国とEU

諸国は、感染源である肉骨粉の、牛などへの使用を禁止する。

だが、九六年三月二〇日、ついにヒトの患者が発生。しかしこの衝撃的な事態に対し、農水省は使用禁止ではなく、「肉骨粉の使用自粛を求める行政指導」ととどめた。しかも二〇〇一年六月、EUは日本の農水省の要請で日本の調査を中止。その年、日本でもBSE第一号が発見された。

その後の不安の幾何級数的な拡大は周知のとおりだが、農水省は、なぜ肉骨粉使用を禁止せず、自粛という行政処分にとどめたのだろうか。内田知成氏を中心とするテレビ朝日長期取材班は、八六年にさかのぼって、この間の経緯を国内外にわたって仔細に追及する。

日本で肉骨粉が使われるようになったのは八〇年代半ばから。農水省

図書館所蔵の『飼料月報』によると、使用量は、九一年八三トン、九二年八九トン、九三年一二四トン、九四年一三二トン、九五年二四七トンと、四年間で約三倍の増加をみせる。

日本科学飼料協会、高木久雄事務局長は、当時の肉骨粉の使われ方を、「乳をたくさん出す牛に対し、能力を十分発揮させるために使ったが、嗜好性が悪いので、飼料の一―二％だった」と回顧するが、たとえば、九五年の二四七トンは、約一万頭の牛が一年間食べ続けられる量である。東大・名誉教授、山内一也氏は、「乾燥したBSE牛の脳が入った肉骨粉を〇・一グラム食べれば発病する可能性がある」と証言する。

取材班は、日本が肉骨粉を輸入していた国の一つ、イタリアに飛ぶ。イタリアでは八七年九例、八八年十九例のBSEが発症しているが、農

水省畜産部飼料課・浜本修一課長補佐は、「肉骨粉と言つても、一定の処理をされて日本に入つていた」と、「ある一定の安全性」が確保されたものを輸入していたことを強調する。

日本は、八七年から九〇年までイタリヤから輸入している。この時期、BSE対策は十分にとられていたのか。

イタリヤの商社責任者らは、「EUで加熱基準法令が施行される九七年までは、すべての商品が全く自由に流通していた」と、告白。「検査体制が不十分な時期に汚染された肉骨粉が日本に持ち込まれた可能性が十分あったが、それを除くための手立ては何もとられていなかった」と証言する。

取材班は、更に重大なデータを発見する。BSEのヒトへの感染が、九六年三月二〇日発見され、WHO

は四月二日使用禁止勧告を出したのにもかかわらず、日本の農水省は、ヒト感染発見から約一か月後の四月十六日、ようやく行政指導を出す。しかもそれは即刻「禁止」ではなく、「勧告」に過ぎず、四月、肉骨粉の回収は、実施されなかった。その理由は何か。

一か月たらずの間に、九二トンの在庫は、限りなくゼロに近づいていた。「飼料業者に売りさばく猶予を与えた」と疑われても仕方がない。当時から二〇〇二年まで農水省事務次官を続けていた熊沢貞昭氏は、その責任をとつて今年一月辞任したが刑罰はなく、退職金八、八七四万円を受け取っている。この間の詳細を紙幅の関係で伝えられないのが残念だが、取材班の追及は適確・明快で、息もつかせぬ見事なルポだ。

放映後約半月、BSE疑惑は、各

新聞の一面記事となり、国の調査委員会は、三月二一日、肉骨粉の使用について「農水省に重大な失政があった」と調査報告をまとめ、衆議院本会議に提出。武部勤農水相の進退問題に発展した。多くの証人の表情一つ一つまで映像として映し出したこの報道は、動かしがたい証拠の一つとなつたにちがいない。

優秀な人材と豊かな資金を持つメディアは数多い。「本もののジャーナリズム」が、この例のように日本を浄化することを願つてやまない。(C)

*

(四月四日、小泉首相は武部農水相の続投を宣言、「第二のエイズ」の結末のつけ方の甘さが問われている。牛肉詐称問題にまで発展したこの問題、一歩進めて、今後はさらに早くから疑惑にメディアの追及が始まることを祈りたい。)

「273号」

▼今朝、二七三号が届きました。ありがとうございます。早速なは女性センターの本棚で市民の皆様にご利用してもらおうよう配置します。

中村文子さんについて今号特集を
拝見して、私は涙があふれてしまいま
した。あまりの感動に、読むというよ
りもなんといいですか、見とれてしま
うという、そんな感じです。

実は、私は六年か七年ほど前に、エイボン賞に中村文子さんを推せんしたことがあります。資料を山ほど集めて、編集・作文しました。残念ながら落選しましたが、今回、地の塩賞が、そして、二七三号特集が、なんと輝いていることか!!

本當に、とてもとてもうれしいですし、素晴らしいです。皆さまと共に、よろこびしたいと思います。

最後になりましたが、「あごらめい」と「ご紹介」にお礼申し上げます。過分にすぎて穴に入りたいぐらいですが。多忙すぎて島袋由記さんとも電話でやりとりしている時です。二人で掲載して頂いたことがまた、なんと申しましようか、二〇歳くらいサバ読んだ写真（ナイロビ会議の時）で、ナツカシーイので、ありがたく感謝の気持ちで胸が熱くなりました。

これからの、おたがいの女性たちの、
そして『あごら』の活躍を心から願つて
イエーイ。

また、お会いできますように……
皆さまのご多幸を祈りつつ、まずはお
礼まで。
（沖繩・粟国千恵子）

(沖繩・栗国千恵子)

〔274号〕

▼昨日、二七四号お送りいただきま
した。表紙に、私の名前があつたので、

びつくりしました。しかも「不幸の源泉に挑む」という、かつていいタイトルと一緒だったので、少々、おもしろい気持ちですが、皆様の大いなる励ましのお気持ちと感謝しています。本当にありがとうございます。

今後ともよろしくお願いいたします。

(大阪・宮地光子)

▼『あごら』をお送り下さってありがとうございます。ありがとうございました。「らいてう」の映画についての批評を嬉しく拝見しました。

あのように受け止めて下さって、私の想いを正確に丸ごと受け止めて下さって、しみじみ嬉しく思いました。

心より御礼申し上げます。

それなのに私は無智で『あごろ』という凄^{こわ}い御本のあることを実は初めて知った次第です。

このたびは本当にありがとうございました。
(羽田澄子・映画監督)

(羽田澄子・映画監督)

▼「膠原病よ、我が友よ」人生は愛と喜び（ヨーゼフ・シントラウス）

病院のエレベーター内に流れる「人生は喜び」を聞きながら退院したのは昨年十一月。三十年來の難病の暴進と肺炎のため、盛夏の八月に緊急入院し、地獄の入口を生きつ戻りつしつ四カ月目でまた娑婆に帰って来てしまった。ここ何年かクリスマスも正月も病院で過ごしていたので、今年はやれやれ孫の顔がとっくり眺められる、と喜んでいた矢先の退院九日目、今度は低血糖で意識不明になり、三鷹から救急車で目黒のこの病院へ運ばれて来た。約六時間後に意識が戻った時、顔をつけんばかりに私の名を呼びつづけていた女医さんに「アラ、先生いつ見ても美人ですね」が私の第一声だった。それで「よかった！ よかった！」と枕元を囲む先生方の異常な喜びようが私にはのみこめなかった。同行してくれた嫁さんの話によると、「あのまま

あの世行きか廃人になる所だった」そうで、原因は私の注射ミスによるものだから、先生にひどく叱られた嫁さんには気の毒なことをしてしまった。

こんな顛末で、あちこちに不義理をしたまま昨年暮れた。しかし入院のおかげで、今回もさまざまな人と逢うことが出来た。カーテンでブロックして何も語らなかつた隣のベッドの人も、一、二週間もすると行きずりの気安さから、少しずつ心中を披露してくれて、一カ月もすると何十年來の知己のようにしやべり合っていることに気づく。お互いが臨床心理カウンセラーの役目を果たし、それが患者にとつて何よりの癒しになっていることを、先生方も看護婦さんも家族もあまり気づいていない。

深夜二時半、そつとドアが閉まり、今夜も僚友の遺体が霊安室へ運ばれて行った。今年は病床へ辿りついた人たちの愛憎物語をポツポツ書いて行けた

らと思っている。（近石綏子・劇作）
（「テアトロ誌2月号」に掲載の原稿を、近況代わりに送ってくださいました。）
▼あごろ三十周年おめでとうございます。

会員になってまだ一年ですのに、ずっと以前からおつきあい下さっていたような気持ちになるのは不思議です。

三十周年のこと、いろいろ教えてください。そして、これからの歩みを共にして行けるように、小さな発信をしたいので、御指導下さいますようお願い致します。

昨日、湘南台文化センターで、第四回市民ミュージカル「もつともつと……平和に！」を観に行つて来ました。藤沢には、平和の白いリボン運動実行委員会等、さまざまなネットワークがありますので、協力を願いましたら、長倉さんの写真展開催が可能だと思います。私にできることをさせて頂きたいと思います。

八月の「ヌエック女性学・ジェンダーフォーラム」にも、一月に（藤沢市女性学習グループ連絡会）の学習会で問題提起をした「母親の教育観とジェンダー」を発展させて、小さなワークショップを応募してみる予定です。

（藤沢・大浅田敦子）

▼南無妙法蓮華經

二〇〇二年三月二五日 ジェネーブ

あたかな日本の春を楽しみ、さまざまな花々のかおるヨーロッパの春のさかりにたち降りました。

パリからジェネーブに直行し、モスクワからバスで合流したセルゲイ師と再会するや、パリにてチエチエンの重大な会議がフランスのチエチエンサポートのグループによって開かれるとのこと。急きよ二人でパリに戻りました。

金、土の二日間、チエチエンのリーダーたちが初めて一堂に集まりました。アフメド・ザカエフ副首相兼停戦交渉

チエチエン全権代表、イリヤス・アフマドフ外相、他、アヒアド・イディコフ議会外交部長、文化相、健康相、グロズヌイ大学長、チエチエン考古学の権威、チエチエン舞踏団ディレクター、チエチエン人権NGO、ロシアからはメモリアルのリーダー、サンクトペテロブルグの兵士母親委員会など。

二日間、チエチエン、ロシアの現状分析、政治的解決に向けた展望と問題点、ヨーロッパの役割、具体的な今後の運動など、自由な意見を交換しながら、みっちり話し合いました。長年このような機会を持ちたいと念願してきた私としても、画期的な一進展でした。国際世論がこのチエチエン戦争の行為を、まぎれもない戦争犯罪、人類に対する犯罪として糾弾してゆく流れを築かねばなりません。この問題に焦点をあてた国際会議に、人権NGO、国際法学者、政党議会平和運動を結集させることが緊急の課題。

また、いまも続く住民殺害、連行、行方不明の情報、難民の状態、民衆の非暴力レジスタンスの行動を、逐一、世界中に知らせ、効果的な国際連帯のレスポンスを可能とするネットワークの確立が重要。

次に政治的解決へのチエチエン側のスタンスを明確に国際社会に認知せしめること。

それは、武力解決はありえず、武力闘争の放棄、テロ行為の糾弾、武装解除と非武装地帯設置にむけた国際的なメカニズムの確立。

ロシア側の正式な歴史謝罪と国際社会によるチエチエン民族が経た歴史的現実の認知が不可欠。

これをチエチエン側の政治交渉のミニマムのスタンダードとして国際世論の支持を得ること。

以上の内容を会議の中で、あるいはザカエフ、アフマドフ、イディコフなどとプライベートに話し合うことができま

した。

次に緊急に依頼したいこと。

一、アンドレイ・バビツキー氏の来日の件。
パリでバビツキー氏(『アフガン帰還兵の証言』の筆者)と会うことができ、氏の来日の意向を確認しました。日程の可能性を検討してください。五月頃がよいとのこと。

二、チェチェン舞踏団はヨーロッパで大成功を博しました。先日、二度目のヨーロッパ公演がありました。

戦場での彼らの姿とダンスを撮ったビデオをDHLで送ります。強烈に胸を打つはずです。彼らは戦場で練習をつづけ、チェックポイントでロシア兵に連行されそうになった時、無我夢中でチェチェンダンスを舞いつづけチェチェン魂を見せつけたというエピソードがあります。このビデオを基にいろいろな可能性が探れるとよいのですが。何か日本各地のサポートが得られないでしょうか。

三、もう一本のビデオにチェチェン難民の生活が記録されています。活用していただければ幸いです。

昨夜、パリよりジュネーブに戻りました。マデイナとマホメッドに久々の再会でした。

これから国際人権委員会に参加します。合掌。

「新会員からひとこと」

▼山川久子さん(新潟県新井市)

「男女共同参画社会やジェンダーについて勉強中。渋谷典子さんから、貴重な資料をいただきましたので、広めていきたいと思います。(あごろ)と出会って、「平和な環境」を考えるようになりしました。(あごろ)一年生ですが、読んでいるうちにどんどん吸い込まれて、今のままでよいかなあと思うことがたくさんあります。女であり、子どもを産み育てる一人として、子育てと女性の生き方について勉強し、多くの

問題について、考え方をつくっていきたいです。昨年九月から中東六か月の旅を終えて戻ってきた秋田生まれの居候がいます(上越教育大大学院二年生)。

シリア・ヨルダン・イスラエル・エジプト、特にパレスチナのガザ地区の障害児の子どもの食事や、おむつ取り替えの介護ボランティアを体験して帰国。ラマダンの断食について尋ねると、貧しくて食事を取れない人の苦しみを分かち合う意味があるという。日本にな

い大切なものを感じたと、貴重な体験をどくとどくと話してくれました。」

▼星野邦子さん(新潟県中頸城郡)

「議員であり、家は商売をしているので、大変忙しく生活しています。今は、平和と環境の問題を追及している(地球村)(NGO・会員十二万人)の活動もしています。興味のある方は、<http://www.chikyuuura.org>。」

(お二方とも(上越)鈴木勢子さんのご紹介です)

「275号 編集後記」

という達成感。

皆さまお疲れさまでした。

(加藤祐子)

▼久しぶりに九州の担当でしたが、少ない人数で四苦八苦の原稿です。これからの拠点の活動をどうしていくか、ターニングポイントのようです。(い)▼女でも男でもない第三の性の人びとは、歴史認識としては無視されてきました。これは、私たちのなかに頑固に根をおろした排中律にあります。

この過程に対する内省がどこまで進むかに、ヒトの未来は、かかっています。(河野信子)

▼(あごら九州)の二十五周年を記念して、本誌への記念号を企画しようと数人のあごらメイトで音頭をとり始めたのは、一年半前。豊前市の朴仙の里という温泉宿で深紅の彼岸花をめでながらの合宿からでした。産みの苦しみは長いものでしたが、みんなの原稿がすすみ、容赦ない議論と検討を重ねるにつれ、これはいけるかも……、

▼(あごら九州)も、雑誌『あごら』出版に遅れること五年で出発。四半世紀、二十五周年を迎えました。雑誌メディアの役割つて情報提供だけではないのは勿論ですね。この早い時代の流れの変化の中で、通り過ぎてから、一度ふりむいて考え直すことが大事な気がする昨今です。

「ジェンダー再考」、ささやかな試論を送ります。ジェンダー論の難解で深い世界に、もう一度関心を呼ぶきっかけを手渡せれば。(福田光子)

▼昨年二月の例会の朝に決めたテーマでしたが、身の程知らずを思い知らされた今回の原稿でした。初めの半月と締切前の一月、それが十三か月のキセル執筆時間です。私がよくやるパスが通用しなかったのも、(あごら九州)の厳しさでしたが、メンバーに助けら

れて文章になりました。(森崎民子)▼(九州)の編集担当で、(あごら三十年) (あごら九州二十五年)を久しぶりに振り返り、心の中に長い間しまいこんでいた「重いもの」の一部を、やっとなし整理できたような気持ちになりました。

「重いもの」と言えば、集会のたびに何十冊もの重い『あごら』を運んでは売り歩いたのも、懐かしい思い出です。

(あごら九州)の例会は、月二回から一回になりましたが、今もきちんと続いています。お若い方がたのご参加をお待ちしています。(小島サカエ)▼久しぶりに拠点が一年かけてつくって下さった労作が届きました。ずしりと重い『あごら』になりました。

ちょうど既刊一覧をつくりながらバシクナンバーを見直し、『ミニ』の頃の各拠点の熱気を思い出しました。お互いに三十歳若かったのですね。

(東京事務局)

あごら総目録

(1977年1月~77年12月)

一九七二年二月、『あごら』創刊。今年二月で満三十年。その歩みを前号から目録としてお届けしています。今回は、一九七七年一月から十二月までを「紹介します」。

一九七七年一月、従来の厚い『あごら』をつなぐ、より身近な問題提供誌として、A4判十六ページの月刊『あごらMINI』を創刊。主として各地の拠点が編集を回り持ち担当、それぞれの「発信力」を高めました。

月刊の誕生で、『あごら』は第三種郵便物の許可を得ることができ、従来の厚い『あごら』も、「特集」として、第三種の料金で発送できるようになりました。

現在の号数は、この『MINI』の号数からスタートしています。したがって、現在までに発行した回数は、現在の号数プラス特集号二十八号分冊を加えたものが実数です。

『あごら』は、どの一冊も、みんなが心をこめてつくってききました。そのため、普通、出版社では売れ残りは断裁するのですが、『あごら』は、一冊も断裁していません。しかし、倉庫料も大きな負担になりましたので、三十周年記念で、特売します。

これで在庫は保存しないことにしますので、必要な方は、同封申込み用紙でお申し込みください。

小さなあごらが生まれました

あごらは あなたを待っています

AGORAは ざりしあのひろば

ざろん・ざわめき・かいもの・ゆうべん

そこからぼりすのぼりしーが生まれました

この小さなあごらには

学者もなく、市場もなく、

ただ あなたを待つ心だけがあります

全国ちりぢりにはたらき

全国ちりぢりに考えている皆さん

あごらに声をお寄せください

小さな点が線となり面となつて

働く女性のしあわせにひびいてくる日まで

あごらは あなたを待ちつつづけます

『あゝらM—N—』

創刊号(一九七七年一月)

表紙〈創る女〉 沖繩・渡久地真理子さん(撮影・松本路子)

〈快談・怪談〉 77年マンリブ・ウーマンリブ

林慶子／永岡富雄／おさかべ・たけし／ほか

〈これだけは言いたい〉 消えた生活館 野本三吉

〈これから・その後〉「ポスト1313」 「女性文化資料館」

〈伝えるー〉お金を出してでも伝えたいコト

〈訴える〉初任給格差とたたかう 高橋悦子

〈読む〉林郁『風の音が聞こえる』丸谷才一『川のない街

で』新しい地平編『愛と激動 時代を生きた女たち』

〈聞く〉抱いて抱かれたがる日本の男 イアン・ブルマ

〈実務シリーズ〉 やさしい編集1

〈切抜きから〉 一九七六年十二月一日〜七七年一月五日

〈女のつどい・女の講座〉 一月十五日〜二月十九日

二号(一九七七年二月)

〈巻頭言〉 スタイリストはなぜ死んだ

〈快談・怪談〉 夫についてホンネを語る

あゝら東海有志II 青木道子／天野正子／石井光子ほか

〈集会から〉 司法界の女性差別告発集会／有職婦人クラブ

全国連合会研究発表会／〈あゝら九州〉スタート

〈資料〉 婦人問題企画推進本部「国内行動計画」

〈読む〉 雑誌「わいふ」特集「主婦とウーマンリブ」／魯

迅著、松枝茂夫訳『ノラは家出してどうなったか』

〈見る〉 ミュージカル「女の解放」 欽衝記 横山展子

〈報告〉 第一期C.R.に参加して 中村肇子ほか

〈あゝらメイト〉 〈あゝら北海道〉 山口里子さん

〈これから・その後〉 愛知県・婦人タレントコーナー

〈実務シリーズ〉 やさしい編集2

〈切抜きから〉 一九七七年一月六日〜二月七日

〈女のつどい・女の講座〉 二月二十日〜三月二十五日

三号(一九七七・三月)

〈随想〉 電車の中の母と子 青木やよひ

〈快談・怪談〉 スタイリストはなぜ死んだか

栗原京子／保科朋子／矢坂祥子／石野貴子ほか
〈創る女〉 石の彫刻に魅せられて 川島登茂美さん

〈集会から〉 政府の国内行動計画に不満を表明する集会ほか

〈これからその後〉 終わっていない三十歳闘争 清水陸子
〈資料〉 「国内行動計画」・その問題点

〈読む〉 『土と女』真尾悦子著／『面白さの哲学』福田
定良著／別冊宝島『おんなの事典』

〈聞く〉 底辺が広い米国女性の解放運動 河野貴代美

〈あこらメイト〉 北村三和子さん

〈実務シリーズ〉 やさしい編集3 セガわ・ともこ

〈切抜きから〉 一九七七年二月八日～三月七日

〈女のつどい・女の講座〉 三月十六日～四月二十六日

四号(一九七七・四月)

〈巻頭詩〉 永瀬清子「流れるごとく書けよ」画・藤原悦子

〈快談・怪談〉 転勤を考える 浅井英子／太田美智ほか

〈あこらメイト〉 〈あこら東海〉 高橋ますみさん

〈読む〉 縫田暉子『福祉—人と心』／エリカ・ジョング

『飛ぶのが恐い』

〈見る〉映画「出会いへの道」

〈伝える〉「初任給格差を闘った」結果 高橋悦子

〈あこら会員の本〉 縫田暉子『福祉・人と心』／俵萌子

『結婚とは夫とは』／駒野陽子『女教師だけをせめないで』

水野るり子『動物図鑑』／下村満子『減速経済を生きる』
追貝左文郎『近衛兵 星野彦太郎の日露戦争』

〈実務シリーズ〉やさしい編集4

〈女のつどい・女の講座〉四月十九日～五月二十二日

五号(一九七七年五月)

〈特集〉 ほんとうに女たちが期待できる政党は？

各政党にきく——熱弁観戦記

〈訴える〉 着物と君が代 杉浦雅恵

〈伝える〉 どうしたらいいでしょうか？

〈募る〉 あこら全国大会実行委員を募る！

〈あこらメイト〉 〈あこら九州〉 小島豊子さん

〈読む〉 中山千夏『男たちよ！』

〈見た？〉 テレビ出演余話(NHK「奥さん」一緒に)

浅野美和子

〈女のつどい・女の講座〉 五月十四日～六月七日

16号 (特集) 女と結婚 77年5月

インタビュー「自分と仲がいい人間」の人間関係ヤンソン由美子

論文

社会構成単位としての家庭

森本和夫

「しあわせなる結婚」の実態

報告 中国の女性解放

松井やより

ジェッシ・バーナード 河野貴代美訳

ティーチイン 結婚の幻実

グループ紹介

宮下喜代／伊藤敏子／万年とみ子／世永元治／碓賢治ほか

（国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会）

か

（序声）（結婚改姓に反対する会）

随想 私と結婚

あこら読書室

ぶつかりあいの中から

巖谷丁子

ある夫と妻

岡部栄美香

“あたりまえ”の結婚生活のなかで

岡田麻子

いい男をえらびいい結婚をしよう

中嶋里美

いやなことはやらないで暮らしてきた私

佐伯洋子

もうひとつの結婚

江口雅子

夫との関係

山口里子

おそすぎた結婚

根本昭子

別居から自立へ

須藤昌子

講演より

あこらのあこら

文化人類学から見た日本の結婚

祖父江孝男

国際的視野からみた日本人の結婚

沢田マルガレーテ

随想 結婚は易く離婚は難し開運相談にみる結婚 楨玉淑

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

ルポ 「仲人連盟」を訪ねて

田坂 生

玉川こんみゅん―ある共同体の試み―

長谷川知子

報告

中国の女性解放

松井やより

〈あこらメイト〉いのちある限り学び続ける 根井はるさん

グループ紹介

（国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会）

（序声）（結婚改姓に反対する会）

あこら読書室

駒野陽子『女教師だけを責めないで』／依萌子『結婚とは夫とは』／ポール・ブルックス著 上遠恵子訳『生命の棲家』／レナタス・ハードグス著 深尾飢子訳『心をささえる五一章』／水野るり子『詩集・動物図鑑』／イ

ーテス・ホシノ・アルトバック著 田中寿美子・掛川ト

ミ子・中村輝子訳『アメリカ女性史』／あこらに寄せら

れたミニコミ情報

新聞切抜帖 77年3月8日〜4月15日

あこらのあこら

ミニ創刊／15号／あこら北海道／あこら東京／あこら東

海／あこら九州／仲間いませんか！／海外から

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

資料 ●結婚に関する法律 ●五二年度 国の婦人関係予算 ●国内行動計画

六号（一九七七年六月）

〈特集〉 女の代表として立ちまゐります！

提案権のある野党で闘う 田中 寿美子さん

参議院ジャックを目指す 吉武 輝子さん

参議院全国区を男女同数に 俵 萌子さん

女性優位の新しい社会を！ 榎 美沙子さん

〈これから・その後〉（婦人相談センター）を訪ねて

〈創る女〉ステンドグラスを作る森本康代さん（松本路子）

〈訴える〉先天性四肢障害問題を考えましょう 佐藤伶子

〈伝える〉「政治を変えたい女たちの会」アピール

〈読む〉現代のエスプリ No. 117『現代女性の精神構造

アイデンティティの模索』

〈見る〉女性週刊誌以上（？）のモーニング・ショウ

〈実務シリーズ〉やさしい編集5

〈女のつどい・女の講座〉六月十日〜三〇日

七号（一九七七年七月）

〈随想〉女坑夫のこと 漆田和代（イラスト・藤原悦子）

〈ルポ〉TVの女性番組どうなっているの 武田和衛

〈集会から〉新・女時局大演説会

〈聞く〉ユキ・マライニさん

〈訴える〉魔女裁判 土方恵

〈あこらメイト〉斉藤千代さん

〈見る〉魔女コンサート

〈会員からの海外だより〉中国・北村三和子

〈女のつどい・女の講座〉七月十一日〜二十七日

八号（一九七七年八月）

〈随想〉朝顔のお守り 漆田和代

〈展望〉参議院選を終わって 斎藤千代

〈創る女〉ゴーマン・美智子さん 撮影・文 松本路子

〈集会から〉東京都 婦人問題を考える対話集会

〈読む〉大庭みな子著『浦島草』

〈見る〉映画「竹山ひとり旅」 新藤兼人監督

〈訴える〉名古屋市教育委の教科書採択を傍聴して

〈伝える〉あこら全国大会、十月二十九・三〇日

〈あこらメイト〉（あこら京都）塚崎美和子さん

立木侑代

〈各地のあこら〉（あこら東海）・（あこら北海道）

〈女のつどい・女の講座〉八月十日〜九月十日

九号（一九七七年九月）

〈随想〉 隣の女 斎藤千代

〈問題提起〉 化粧品は顔の農薬

〈集会から〉 日本母親大会／第二回婦人研究者全国シンポジウム

ジウム

〈あこらメイト〉 （あこら千葉） 田村美佐子さん

〈読む〉 澤地久枝『烙印の女たち』／木村治美『黄昏のロンドンから』／リン・ブルームほか『自分を変える本』

〈実務シリーズ〉 やさしい編集6

〈女のつどい・女の講座〉 九月十日〜三〇日

十号（一九七七年十月）

〈随想〉 パートのおばさん 合田京子

〈快談・怪談〉 主婦の再就職「アタック失敗談」

奥村和子／浅野美和子／大橋倫子ほか

〈集会から〉女性史のつどい 浅野美和子

〈創る女〉（緑）の演出家大崎範子さん（撮影・大崎貫）

〈伝える〉 ルームメイト募集／（あこら京都）発足！ほか

〈読む〉 物語女流文壇史（上・下）巖谷大四著

〈聞く〉 中国訪問レポート 東海地方婦人活動家

〈見る〉 女たちこころみコンサート 伊藤汎美

〈あこらメイト〉 （あこら東海）立木侑代さん

〈女のつどい・女の講座〉 十月九日〜十一月五日

十一号（一九七七年十一月）

〈詩〉 飢餓女考 渋谷美代子（イラスト・鈴木トミエ）

〈快談・怪談〉結婚のホンネを語る（あこら北海道）有志

〈聞く〉道炭婦協会長 福井よし江さんをたずねて

―組織された主婦のたたかい―

〈ルポ〉北海道の「かけこみ寺」訪問記

〈すてきな女〉 あこら北海道・山岡路子さん

〈読む〉 『ベガンベの詩』（美唄消費者協会刊）

〈小休止〉 女性客のみコーヒー十円で飲ませます

〈女のつどい・女の講座〉 十一月十日〜十二月十一日

77年11月

インタビュー

自発的な学習の場としての情報センターを

縫田曄子

論文

女性の生涯学習への一提言

高野フミ

女の成人教育の問題点―文部省の政策と東京都の現状

中山宜子・野々村恵子

ティーチイン なぜ生涯教育をテーマにするの？

あこら九州有志

調査 東京都下の婦人学習グループを調査して

ルポ 女が学ぶところ

婦選会館市民大学講座／東大公開自主講座／

目黒主婦大学／母親勉強会／朝日カルチャーセンター／

もうひとつの学校／東京都立新宿婦人専修職業訓練校

随想 私にとっての生涯学習

心の充足を得られる学習を求めて

リブが私を変えた！

仕事に学ぶ

学習することの模索のなかで

私の「学び」考

草取りをしながら

ボランティア活動に学ぶ

女性史との旧交をあたためる

私と農業公害

CRに出会ったということ

PTA活動に学ぶ

“各論「婦人学級」”に身を置いて

私にとって“学ぶ”こと

講演 名古屋市における婦人教育行政

報告 九九%の男性で作る新聞の五〇%は女性読者

深尾凱子

ワシントン大学の婦人運動と全米の新しい運動

福井浅子

寄稿 詩「夕日時」「分裂」

赤松ともい

グループ 政治を変えたい女たちの会／でいん・だん・どん

あこら読書室

鹿野政道・堀場清子『高群逸枝』 L・ブルームほか

『自分を変える本』 A・モンターギユ著 中山善之訳

『あしたの女たちへ』 樋口恵子編・著『女はすぐれて

いる』 全国私立保育連盟編『昭和五二年度版 保育所

問題資料集』 柳洋子『愛の生涯教育』 下村満子『世

阿久津 信

界の大経営者たち』 森村桂『もうひとつの学校』

美森成生著・藤川秀之画『不思議な釣鐘』

新聞切抜帖 77年4月15日～9月14日

あごらのあごら 16号／参加したい／疑問／ホンモノ志向
資料 国立婦人教育会館の事業運営／昭和52年度 国立大
学公開講座実施計画／「女性の権利に関する特別委員会」
要綱

十二号(一九七七・十二月)

〈随想〉 落ち葉の季節に 斎藤千代

〈あごら全国大会に出席して〉

各地の〈あごら〉経過報告／全国集会を終えて／〈あご

ら〉大会会計報告／報道された〈あごら〉大会

〈読む〉 『独身婦人連盟十年のあゆみ』

〈集会から〉 一ツ橋大学文化祭シンポジウム

〈すてきな女〉 全国大会実行委員・山本佳苗さん

〈女のつどい・女の講座〉 十二月十日～一月十四日

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

03-3402-3244

03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

リニューアルした
「ふえみん」を
プレゼントします。

大阪支局
〒530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404
& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ／毎月5・15・25日発行
購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。



「あごろ」は、人と人が出会うつひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指す ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あごろ」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は二千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

「BOC」の登録録も、どうぞ……

一九八〇年に生まれた「BOCバンク・オブ・クリエイティビティ」は、創造力の銀行。あなたの創造力や特技、希望の報酬を「連絡ください」。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな創造力でも歓迎！ ただし、半年以上「あごろ」会員の方に限ります。

連絡先

こちらまで 〒160-0022 東京都新宿区新宿 一―九―四 中八ビル
☎ 03-3354-3941(代) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com

あごろ 275号 ジェンダー再考 ●発行2002年4月10日

●編集 あごろ新宿

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体930円＋税 ●振替 00100-0-5264



9784893061232



1920036009305

ISBN4-89306-123-2

C0036 ¥930E

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体930円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 ☎3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

あごら30年記念集会は

8月25日(日)13時00分～
シニアワーク東京で

70年代からの女の状況を回顧し、
「あごら」の30年を点検する
シンポジウムを開くことにしました。
あなたが「ぜひと」と思う方を、
パネリストにご推薦ください。
そして、是非ご参加を！
会場は定員三〇〇人ですので、
お申し込みはお早めにごうぞ。
宿泊を希望される場合は、
予約しますのでご一報を。

あごら30年・女の30年

●シンポジウムのあとには懇親会も開きます。

参加費／シンポジウム1000円 懇親会3000円

参加のご予約は、ファックスか E-MAIL で。

●〈あごら〉のホームページを開設しました！

URL : <http://homepage2.nifty.com/agora1/>

内容はまだまだ未整備。アイデア大歓迎！

お手伝いをしてくださる方いらっしゃいませんか？

●30年記念基金も募集します。

一口1000円。何口でも…

郵便振替＝00100-0-5264

口座名＝BOCあごら編集部



〈あごら事務局〉

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

TEL: 03-3354-3941 FAX: 03-3354-9014

E-mail XLV05467@nifty.com